



教科センター方式による 中学校計画 1

中学校の校舎は、これまで多くが小学校同様、クラスルーム・普通教室と特別教室の組み合わせからなる「特別教室型」の運営方式により計画されてきた。これに対して近年、「教科教室型」あるいは「教科センター方式」による計画例が徐々に増えつつある。教科教室型は、従来普通教室で行われていた国語・社会・数学・英語等のいわゆる一般教科を含め、全ての教科が専用の教室を持ち、生徒が自ら教室に移動して授業を受ける方式である。その教室の配置に当たって、単に廊下に並べるのではなく、教科や関連教科をまとめてオープンスペースと組み合わせ教科ブロックを構成する考え方を教科センター方式と呼ぶことを提唱した（よみがえれ中学校-特集 教科センター方式による中学校計画、アイ・スパンVol.13、教育環境研究所、1996.5.15）。このオープンスペースは教科のメディアセンターとして、教科関連の図書・資料・コンピュータ・機器・作品等を整備し、主体的な学習活動を支え、魅力的な教材提示をやすく、チームティーチングにより弾力的で多様な学習展開を可能にすることが期待される場である。それは教育観をベースにしている点で、特別教室型はもちろん、教科教室型とも区別される。

その可能性が注目されるようになったのは、福島県三春町が昭和58年度から10年余りにわたって取り組んだ学校改革の中で、4つの中学校がこの方式を採用し、公立中学校再生の可能性を示したと言われた教育実践に成果を挙げたであった。学校視察を通して評価され、新たに採用した学校がまたそれぞれに特色ある学校運営と教育的な取り組みを進め、目にも魅力的な教育環境を創り上げていった。

教科センター方式の増加は単なる流行ではない。学校ごとに採用する背景と学校づくりの明確な目的があり、それに対応した配慮が必要とされる。一口に教科センター方式と言っても、学校規模、教育活動の重点の置き方、学校生活のとらえ方、教員体制の考え方等によって、教室の種類・構成や配置、ホームベースの考え方や面積・配置方法等には様々なバリエーションがある。

計画例が増え、様々な可能性や課題が見えてきたこの時期、教育観や学校観について十分な議論がなく新しいからというだけの採用や、不十分な理解のまま反対意見が述べられるといった様子も見受けられる状況の中で、教科センター方式の考え方や計画論を、実例をもとに整理することが本特集のねらいである。従来型と二項対立的にとらえるのではなく、比較検討の中で、既成概念にとらわれることなく学校の教育・生活について改めて見直す機会となることが期待される。

coordinator 東洋大学工学部教授 長澤 悟

— 座談会 — 教科センター方式と教育計画のあり方

東洋大学教授

長澤 悟

前福島県三春町立桜中学校長

井田 勝興

前東京都港区立六本木中学校長

小島 亮

前新潟県聖籠町立聖籠中学校長

坂口 眞生

近年、学校建築で注目されている教科教室型。全国的にもこれを採用する学校は増えているが、未だに躊躇いの声があるのはなぜなのか。今回は各地の学校計画で実績を残されている長澤悟東洋大学教授と、教科教室型の運営に関わられた井田勝興氏（前福島県三春町立桜中学校長）、小島亮氏（前東京都港区立六本木中学校長）、坂口眞生氏（前新潟県聖籠町立聖籠中学校長）のお三方より、「教科センター方式と教育計画のあり方」についてお話いただいた。

長澤：学校というのはハードとソフトを統合して一つの育ちの場をつくるものだと思います。今、中学校の新しい動きがいろいろ浮上しており、その一つが教科教室型を採用した新しい学校づくりですが、その始めは三春町の桜中学校から発しているものと思います。本日ご出席のお三方の校長先生は、それぞれの学校づくりの前の段階で教科教室型の議論に関われ、さらにできあがった学校の校長に就任されて、学校運営の中心になってこられたことです。今日は教科教室型の施設を生かした学校経営、教育のあり方などをお話する中で、これから教科教室型に取り組もうという学校の参考となるご意見が伺えるのではないかと思います。最初にそれぞれの学校の概要と計画の経緯、その中で特に学校づくりへの取り組みについて簡単にご紹介下さい。

先に教育の方法・内容の改革ありき その実現めざした施設のあり方追及

…桜中学校、岩江中学校

井田：20年程前、三春町で全国的にも珍しい教科教室型の学校をつくるということになり、私は教育委員会の中で学校づくりのコーディネーターの役目を努めてきた経緯から、その延長線上で桜中学校の校長に就任しました。当時の文部省の話では、教科教室型という言葉自体が耳新しく、全国でも20校ぐらい、その内機能している学校は半分にも満たないのではないかとということでした。桜中で4年間学校づくりに携わり、次いで岩江中学校の校長として6年、その後、三春小学校に3年勤め、今年の3月に退職しました。三春小学校でも中学校の教科センター方式や指導主事時代に地域連携や学校づくりを地域と一緒に取り組んだという経験が非常に生きたという実感を持っています。

長澤：そうですね。

井田：「教育とは子どもの生きる喜びを育む営みである」ということが、私たちの全ての教育活動の基本になってきたと今でも信じています。ここから発して三春町が掲げた教育改革のスローガンは「子どもの夢の育つ学校づくり」

であり、そのことを達成させるために3つの目標を立てました。一つは教育のソフトのほうで「創造的な教育観を確立をする」、つまり教育方法と教育内容の改革をすること、今までの一斉画一の教育の体質からの脱却ということです。二番目の柱として、創造的な教育観を実践に移す時に、それを支えるハードとしての「施設整備の改革を進める」ということ。そして三番目としては、「地域住民の教育参加」ということです。私は校長としても教員としても欠けていた部分があるとすると、それは学校の中だけでものを考えてきたということです。子どもにとってよりよく学ぶ環境を作っていくというハードの考え方と、地域の中で教育を住民と一緒に考えていくという目線が不足していたと感じています。そういう意味で、三春が教育のハードの面と地域住民の教育参加を掲げたところに先進性を強く感じています。この3つの目標を有機的に関連させながら機能させることによって、教育改革を進めてきたのが三春のやり方です。今までは、行政がハードをつくってからそれに合う学習活動や学習内容を考えるというもので、ソフトの方が追いつかないというのが一般的な傾向でした。三春の学校建築は、教育方法や教育内容の改革が先にあって、それに合った学習活動が展開できる施設のあり方を追及するという手法でした。こうした考え方で、小学校のオープンスクールをはじめ、中学校では教科教室型がつくられたのです。たまたま当時の三春では、10数校のうち8校ぐらいが新築・改修の対象になったものですから、町を挙げての改革になったわけです。

子どもを管理する意識を打破 人的配慮で生きる教科教室型…六本木中学校

小島：六本木中学校は三春町の学校づくりを参考にできたようなものですが、港区の場合は区を挙げての支援ということではありませんでした。私は建物に関しては満足しているのですが、運用に関しては不十分でしたので、歯がゆい思いで昨年の3月に退職しました。六本木中学ができたきっかけですが、当時、麻布地区にあった三河台中学校と城南中学校という2つの中学校が統合することになり、平成8年、私が城南中の校長になった時に検討委員会が正式に発足しました。在来の校舎の考え方ですと子どもを管理するという意識が強かったので、それを打破するためにも、教育に対する考え方を全く変えなければいけないという思いがありました。そのため、検討委員会で先進校を見学に行ったり、井田先生のような方に体験談を伺ったりもしました。検討委員会の話し合いの中で教員から教科教室型に対する反対意見も出ました。子どもに目が行き届かず、学



校が荒れた時に対応できないというのです。でも、私は子どもを信じて活動させなければ効果が上がらないのではないかという思いがありましたので、教科教室型を推しました。特に人的な配慮が十分であったら、教科教室型というシステムがすごく生きると今も思っています。六本木中の場合はオープンスペースがふんだんに用意されています。ですから、一斉授業の後にすぐにグループ別または習熟度別など工夫次第でいろいろな形の授業ができます。ただ、東京都の人事異動の仕方は他府県とは全く違って、区の意向も入りませんし、統合校をつくる場合でも準備室を設置しません。私が城南中の校長在任時、六本木中の校長に任命するという内示があったのは3月20日の卒業式の翌日ですから、人事に関しては希望も何もほとんど出せませんでした。

長澤：それはずいぶん急な話ですね。

小島：4月1日に都の教育委員会から辞令をもらってから、ある程度私が教育計画を含め校訓などの原案を考え、2日以降に教員たちと顔合わせした最初場で、六本木で教科教室型の新しい学校をつくりあげることを説明しました。仮校舎での2年間は教科教室型を運営するための準備期間で、これから新しい学校をつくり出すという姿勢でスタートしましたから、ある面で私の思いだけが一方的に入っているという感がありました。最初に入った教員たちはやる気がありましたので積極的に取り組んでくれましたが、全部がそういう訳にはいかず、はっきり言って難しかったですね。本当は三春町のように、子どもたちが自分で1週間の時間割りを組んで学ぶような教育が夢でした。それができたら、子どもに応じた指導ができる、将来目標は絶えず提示してやってきたつもりですが、教員の足並みが揃わずせっかくのオープンスペースもある教科では使いこなせませんでした。

長澤：そういう事情でも、六本木中を見学に行った先生方

が刺激を受けて帰ってくるという状況はずいぶん聞きました。

小島：新しい学校をつくろうとしていることを、朝礼などで絶えず子どもたちに呼びかけてきましたから、見学者に対する挨拶なども自主的に対応してくれました。こんなすばらしい建物は23区内でも始めてなんだという風に絶えず意識づけ、この建物を使ってやりたいことをやってみなさいと働きかけもしました。だから校舎もほとんどの場所に鍵をかけず、楽器もパソコンも自由に使えるオープンな環境で学校運営を進めてきました。その辺が良かったのではないかと思います。

地域・教職員が全員ハード面に参加 子どもの個人生活を見直す視点重視

…聖籠中学校

坂口：私の場合、平成11年に聖籠中学校から声がかかった時には、もう一仕事しなければいけないのかと思いました。というのは県下でも名だたる荒れた中学校2つが統合して新しいシステムでやっていくという話で、それを立て直す仕事かと思っていたからです。三春町の武藤先生にお会いしたり、井田先生のところを見学させていただいたりして、教科教室型というのを知ったのはその頃です。ハード面について言えば、聖籠町教育委員会に高口という主事がいて、基本部分のカリキュラムについても大枠でデザインをしてくれていました。私はそれを引き継ぐ形で、教科センター方式の内容を学んだり、子どもの実態とかみ合わせ、どういうカリキュラムを作ればいいのかと考えました。従来の学校づくりはハードとソフトは全く離れたものでしたし、学校の建物などは校長でも教員でも注文がつけにくいものでしたが、聖籠町の場合は違っていました。設計の段階から素人の意見も受け入れてくれ、駄目な場合はきちんと説明してくれました。そういうことで職員が全部ハード面から参画しているという気持ちになれたことが一つ。それから地域の人たちはもっと以前から「どういう学校にしたらいいんだろう」ということを本当に一生懸命に学んでくれました。この2つの下地があって教科センター方式が立ち上がったので、どこか地域と浮いた形では全くなかったというのが、私が5年間勤められた背景だったと思います。

小島：それがすばらしいですね。

坂口：同時に私も長い中学校教員生活を白紙に戻すほどの刺激を受けました。学校が荒れていたという問題もあって、今まで集団を立て直すという視点から取り組んできたものを、子どもの個人生活を立て直すという視点から学校をも



東洋大学教授 長澤 悟

う一度見直してみることになりました。聖籠中は約500名でスタートした学校ですから、教科教室型の校舎というだけでは円滑にいかない面もあるのかもしれないと考えたので、個人生活とい

うことを念頭に置き、例えば70分授業、学級とホームベース2つの集団をつくること、3年生を中心に1・2年生を左右におくホームベースを構成するなどの工夫をしました。これは、学年を分けると管理しやすいという発想を転換した考えから生まれたものです。むしろ年代の違う子どもたちが交わって生活することこそ自然で、その中で起きる問題や課題は起きて当たり前だと考えたからです。なかなか勇気のいることではありました。あの広い校舎の中では子どもの行動を把握しきれないので監視カメラを付けて欲しいと職員から強い要望がありました。そこで、私たちはどういう教育をしたいのか、もう一度語り合おうじゃないかということになりました。子どもを信頼できないならば、鉄格子をはめなきゃいけない学校になる、信用していると言いながら監視カメラが行動を監視しているというのは、大人の欺瞞をすぐに見抜かれるに違いないと思ったからです。ちょうど、少人数指導や選択教科の導入が始まって、学級という形態が崩れ始めていた時期だったので、カリキュラムを考え直すのに良い背景でもありました。それからもう一つのポイントはとなるのは、学校が地域コミュニティの中核的な機能を持たせろという考え方です。今までは統合する2つの中学校区民の交流が不足し、1つの町でありながら一体感が乏しく、是非それを解消したいという町の狙いもありました。それから、聖籠町に限ったことではありませんが、確かに子どもたちには問題があるけれども、それは、そもそも親や大人たちにも問題があるからだ。私たちは思っていました。そこで、学校を子どもを含めた地域の人々の学びと交流の場として利用することで、地域の一体感や教育力の向上が期待できます。同時に、問題を抱える子どもたちには健全な生活空間を提供することができると考えました。これは聖籠中を設計された香山先生の「学校を“まち”にしたい」という校舎建築の理念とまさに一致します。私は学校というのは生徒と先生だけが関わり合う場ではなくて、お年寄りから幼児まで含めた町の

人たちと中学生が関わる場であって欲しいと思いました。つまり授業だけが教育ではなく、休み時間も放課後も子どもにとっての教育の場面である、家庭の教育力が低下したとか、学校教育が低下したと嘆いているだけでは、子どもは幸せになれません。それが不十分であれば我々ができることをやろうというプランでした。これはある程度成功したと思います。地域の人たちへの学校開放も進んでいます。町民ホームベースという部屋があって、午前・午後各2人ずつボランティアが詰めている、そういった面は根づきつつあります。地域の方々と触れ合う中で、私は5年間の間に地域と言うものに対する考え方が変わってきました。それまで私は地域の方々、保護者をサポーターだと思っていましたが、今では学校と地域はパートナーであると考えています。ですから情報も発信できるものはドンドン出して、一緒に考えなければいけない、聖籠中で勤務させていただいたおかげで新しいことを学ばせていただきました。

長澤：学校、あるいは学校づくりについては、それぞれ物語があり、教育の捉え方、子どもの見方、関わり方など、それは教科教室型でなくてもあると思います。しかし、一般的にはその物語が見えてこない、そこに教科教室型のような違った概念というか、ある意味で異物が投げ込まれる中でいろいろな波紋が広がり、改めて教育や地域と学校との関わりなどを考えるきっかけになり、その辺から新しい器に応じた関係が生まれているような感じがします。仮にこれが教科教室型の学校でなく、議論もなく従来の学校がつくられていく場合は、どんな形で進んでいくのでしょうか。

学校づくりは発想切り替えのチャンス 教員の心に根ざす本来の教育観

井田：学校づくりを進めていく上ではあまり教科教室型だからとか、そうでないからというようなことに拘る必要はないと思います。そうした学校づくりの過程で、私たちには原点的に求めていくものがあると思っています。私はたまたま新任の校長として桜中に行き、教科教室型に関わることになりましたが、私自身は子どもの頃から学校教育に対して自分の心の中に抱いてきた疑問や不満を何とかクリアしたいから学校の教員になったという部分もあります。今まで自分の中でくすぶっていたものが、校長ならばクリアできるのではないかという思いがありましたから、教科教室型の学校でなくても私は学校教育に対する思いを求めてきたのではないかと思います。先ほど、聖籠町の中学校が荒れていたというお話が出ましたが、三春町の学校も同

様でした。ですから、教科教室型を始める時に一番懸念されたのが生徒指導上の問題で、子どもの移動にどう対応していくかということがよく教員や保護者からも話題にされました。学校側としては、子どもに対して教員の目が行き届かないことに対する不安がある。しかし、「見えなくても見える教育を進めていく」のが本来の教育だと思っています。それには、教師と生徒の間の信頼関係が重要になりますが、「見えなくても見える教育を行う」というのが学校づくりの原点なのではないでしょうか。

坂口：井田先生のおっしゃるとおりですね。ある学校は、教科教室型になって生徒指導的な面で以前より苦勞するようになったという、その結果としてホームベースに机椅子を持ち込んで、そこで学級会をやることにしたそうです。でも、それは教科教室型が原因ではなく、カリキュラム全般の見直しや理念の確認が不十分だったからだだと思います。それと、先生がたは多分に保守的なものですから、生徒の姿が見えないと何しているのかやたら心配しますが、生徒の一挙手一投足を全部自分がコントロールしなければならないという意識を卒業しなければいけないと思います。また、別の視点からの話ですが、教科教室型であろうがなかろうが新しく学校をつくるというのは、先生方のエネルギーを必要とするのは間違いなことです。そういうことに立ち向かうには一人二人ではなく、みんなで協働して取り組むことが大切です。新しい学校づくりは学校を変える良いきっかけになります。そして、教科教室型の場合、運営方式が違うわけですから、いろいろなことを克服すると同時に、自分の思いを反映しなければならない、結果的に、これがすごく学校運営の大きなエネルギーになりました。

小島：結局は大人の意欲が問われるということですね。それで私も教員たちに初めての挑戦だから大変かもしれないが、自分でやりたいと思っていることがあったらどんどんアイデアを出して欲しいと言ったのですが、余り出てこなかった。しかし、中には前向きな教員もいて、今までの学校ではできないことが可能になるから、とても良い経験になると喜んでくれ、非常にアイデアに富んだ取り組みをしてくれました。逆に従来の生活指導にこだわっている先生は戸惑っていて柔軟な対応ができない、それをうまくリードしていくという苦勞はありましたが、教科教室型だけでなく、在来型の学校だって同じです。今までそれが抜けていた、発想を変えるだけで在来型だってできるはずなのですが、教科教室型という一つの形があるだけで、きっかけになりました。

坂口：教科教室型を理解してもらうには、実際に現場を見

せるのが一番ですね。私が少しばかり先に勉強して、生懸命語っても、もう一つみんなの反応が薄かった。でも、岩江中に見学に行かせたところ、ガラッとみんなの意識が変わりました。私がこの



前福島県三春町立桜中学校 井田 勝興

春退職した時、聖籠中の職員たちの異動希望はゼロでしたから、聖籠中の教育活動に意欲を持っているようです。教員は本来創造的な仕事を望んでいるはずだし、聖籠中ではそれが実現できて充実しているんです。

井田：新しい学校をつくっていく時は、発想を切り替えるという意味では非常に大きなチャンスになります。従来の生徒指導や今まで引きずってきた旧来の考えを一回取り去って、本来ならばこういうことをしてみたいという単純で、しかも奥の深い教育論が出しやすいですね。ですから、教科教室型をつくっていく時に、もっと子どもたちの多様な学び方を保証しようとか、子どもの学習スタイルに合わせてその子の個性を引き出していこうとか、普段口にしたりすごく浮いた言葉に聞こえるものが、自然に本音として出てくる、その本音を組み立てていくのがチームとしての学校の仕事であると思っています。

長澤：普段だったら浮いてしまうような本来の教育観が、きっかけがあることによって、お互いに受け止め合えるんでしょう。

井田：結局、教員はみんな志みみたいなものを原点に持っているのです。ところが普段は旧来の教育指導になじんでしまっているから、異なる発言をするのにためらいを覚えるんじゃないでしょうか。

従来型の教室にはないプラス面 子どもが自分の個性の伸びを実感

長澤：それは教育の一番根っこの話で教科教室型に限った話ではないということですね。最近は新しい学校づくりに取り組もうとしている学校が、教科教室型に注目して、それを検討するというような計画事例が増えています。その時の議論の中で、なぜ教科教室型なのかと言われることがあるのですが、それは教科教室型に問題があるのではなくて、重要なのは自分たちがどういう教育をめざすかという点ですね。違うものとすると教育論だけが問題視され教科



新潟市立総合教育センター
(前新潟県聖籠町立聖籠中学校長)
坂口 真生

教室型の良さまで話が進まない。どうも生活指導における動き方とか生徒の把握の仕方とか、環境が変わると今までと全く違ってしまいかもしれないという不安が強いのでしょうか。

井田：そういう経

験をしていなければ、教師の不安は大きいでしょうね。

長澤：井田先生は、当時は計画の段階から指導主事として関わられていて、そのやりとりというのはどうだったんでしょう。

井田：指導主事の頃は、実際に教科教室型の学校もあまりなかったの、見るチャンスもありませんでしたが、自分の中でイメージして、こういう学校になるんだろうなと予想をしていました。三春で教科教室型の学校を進めていくということになった時、それぞれの地域へ出かけて行って地域の人たちと話し合うと、必ず出てくるのが教科教室型への不安、小学校ならオープンスペースへの不安でした。そういった時に、こんな学習空間があるからこそ、従来にない学び方ができ、それが一人一人の子どもの生き方の模索につながってくるのだということを話しあいました。これからの中学校としては教育の課題を解決していくためにはぴったりで、今までの学校観になかった部分を補い、しかも教育としても本来的なのではないかと地域の人と話し合った覚えがありますね。

小島：私は見学にみえる人たちに教科教室型にして良かった面を話します。今は教科教室型の学校が全国にある程度できていますので、そういう方たちは従来の形にはないプラス面をさらに生かしたいということで教科教室型を採用したいと考えているようです。私がメリットとして話したのは、子どもの作品が常時掲示できるということです。校内を見たら全校の生徒の作品が1点以上は必ずどこかに展示されていて、子どもの個性の生きる場が必ず一つあるということ、生徒同士が作品を通じて互いに感化される、教え込むのではなく自分の意志でいろいろな分野に自然に接することができることなどですね。

井田：私は教科教室型の学校のデメリットは何ですかと良く聞かれました。そういう時、私は良かれと思ってやっていることでデメリットはないと答えます。教育に対するデメ

リットというのは、教科教室型ということと関係なく、教育の抱えている問題として共通するデメリットであり、むしろ、教科教室型の方がそういうデメリットにチャレンジしやすいし、克服しやすいよさがたくさんあると説明しています。

坂口：聖籠中では保護者が日常的に学校に出入りしているものですから、ある人から話を聞いてなるほどと思ったことがあります。親は学校へ来ても自分の子しか見ていない、それが度々出入りするようになったらわが子だけじゃなく中学生全体を見るようになり、その中でもう一回我が子を見るようになる。ですから、現実的に具体的に対応してやれるようになったと喜んでくれました。

井田：そういう意味でも教科教室型は見やすい。それから、教科教室型の運営をしていくと、異学年との交流の場面があちこちで見られるようになります。子どもたちにとっても自分と他の人の関係を小さな学級の中だけでなく、同じ学年、違う学年といった広い一つの学校という社会の中で、自分の位置や立場などいろいろなものが見えるようになってきます。そのことはある意味で、社会の常識が学校の中の常識に入ってくるということですから、子どもは社会人としての素養も身に付けることができます。社会の常識が学校の非常識として通ってしまう部分も学校にはあって、教科教室はそういう旧習をも打ち破る力をもっています。

長澤：計画の段階で先生がたと議論すると、最初は必ず違う学年は別々に配置したいと言いますね。

小島：先生がたは子どもたちを集団として捉えたいと思っている、何とか荒れないようにしたいと考えているからです。私は学校を荒れないようにするには、むしろ教科教室型が理想的、三春町が先進校でやっているじゃないかと検討委員会で話しましたね。

長澤：教科教室型は移動するので落ち着かないという観念があるからかもしれませんが、計画の段階では、荒れてない学校なら良いけど、荒れた学校には適さないという意見がよく出ます。三春も聖籠も中学は荒れていました。一番新しいところでは北海道の豊富という中学校です。全国でもこれほど荒れた学校はないと新聞に書かれたほどの学校ですが、それを立ち直らせるためにはクラスづくりが重要ということで、クラス的环境づくりに取り組んでいました。そういう中で、三春と聖籠を見学にいらして、自分たちのやろうとしている学校づくりは教科教室型のほうがより理想に近いということで教科教室型を採用しました。校舎完成後、見学に行きましたが、環境づくりに非常に力を入れていました。例えば、1年生からのメッセージが3年生のホームページに掲示されている、それに対して3年生から1年

生への返信が掲示されるなどの工夫がされていて、異なるホームページを通じて生活的な交流が図られている、これは計画する側の発想をはるかに超えています。子どもを前にした先生方の発想力というのはすごいものだとも思います。それが一般の学校では少しも見えないのは、何か構造的に問題があるのかもしれない、私は建築をやっていますが、建築のあり方が先生本来の力を発揮できないようにしているのではないかなと思うんです。今日出席の先生がたに教科教室型のいろいろな例を紹介していただきましたが、自分が自由にできる空間を手に入れた時に、本来の気持ちを目覚めさせるのだと思いました。

井田：そういう意味では建築家の責任は大きいですね。設計の仕方によって、子どもは設計に応じた動きをする、その動きの意味を建築家の方々はどう考えているのかでソフトの面にも大きい影響が出ます。そうしたことを卑近な例で言えば、学校の中に子どものいろいろな作品があることによって、3年生が1年生の作品を評して「良い作品をつくっている」なんて言葉が聞かれるのは嬉しいことです。教科教室型の学校というのはそれぞれの教科の持っている良さや真実を子どもに伝えやすい、それが大きなよさです。その中で自分の個性が伸びている実感を持てるということは楽しいことです。もう一つは、自分の作品や表現活動を通していろいろな人に自分を認めてもらい自分も相手を認める、双方向の認め合いが生まれて小さな社会の中で自分の存在を認めあえる。それによって価値が共有化され、その学校の中で生きている意味を強く実感できる。そういった効果を期待できるのが教科教室を導入する意義だと思っています。

小島：もう一つあります。私は常々口にしていて実現できなかったのですが、例えば数学の場合、数学オリンピックなどがありますよね。あれに出題される難しい問題を提示することによって、ある子どもは挑戦意欲を燃やします。そういう能力の高い子どもにも刺激が与えられる、チャレンジする機会を与えやすいということもあります。

教育計画をいかに後進につなぐか 状況に左右されない教育課程の一般化

井田：話題は変わりますが、私は中学校の運営からはなれて4年目ですが、その後、その学校がどう動いていくのが非常に気になっています。桜中はその後、就任された校長や先生方が頑張ってくれて、もう10年経つのに私たちが残してきた教育計画がまだ息づいています。岩江中はかなり変わってきている。ですから、教育計画をいかに次につないでいくかが問題になります。公立の学校には、教員

の異動はつきもの
です。ですから、
異動に左右されな
い学校運営をどう
確立していくかと
いうことが、大き
なテーマになって
きます。私たちは
そのため、「子
どもにとっての教
育課程とは何か」
ということ強く

模索してきました。結論としては、だれもが納得しやすいカリキュラム、つまり、「教育課程を一般化すること」だと思ったのです。新しい先生が、赴任した学校の運営に携わった時「子どもが良い方向に育っている」ということを実感して、運営方法を踏襲する中で、自分の個性を発揮して、学校運営に参加しようという意欲を持つことが大切です。そういう中で私が一番努力してきたことは、状況に左右されず永く生き続ける教育課程をみんなで作っていかうということだったのです。そういう意味で三春町がまだちょっと救われるなど思うのは、町の教育委員会の中に学校教育の研究員制度というのを作っていて、各学校から中核になる30代ぐらいの先生がたが集まって子どもの個性を伸ばすための教育課程を研究していることです。そこで「子どもの行き方を保証する教育課程」を一般化するための研究を毎年続けていますが、これは三春町教育改革がスタートした頃から続いています。

坂口：それは武藤先生の時代にできたものですね。

井田：そうです。その研究に関わった若い教員の数がもう200人を超えています。そういった人たちが、今、リーダーになり始めています。彼らが三春町の教育を良かれと思い、三春町に再び戻りたいという状況がこれからは出てくるのではないかと期待しています。そういった手段を講じていかないと公立学校は続きません。ソフトと一緒にこういった事を支えていく行政的な手段がなければ、従来の教育観だけではあんな学校を運営しきれない、先生がたの手に負えなくなるのではないかと思います。

坂口：その通りですね。聖籠町でもそういう意識は充分あります。それに加えてお話をすると、学校風土というのは、風と土と書きますが、教員は何年か経てば移動して通り過ぎる風です。土は町民、地域の方々です。手島教育長は聖籠町民立中学校にしたいという思いがあります。評議員制度はまだ条例化されていませんが、学校の中に常駐するボ



東京都港区立つばさ学級
(前東京都港区六本木中学校長)
小島 亮



ランティアの人たちは評議員並みの発言をして、きちんと学校の運営を評価してくれています。これをもう少し形式を整えていけば、十分、町民が力をつけてくると思います。将来は「学校運営委員会」みたいなものを作って、町民がしっかり校長の相談役、場合によってはお目付け役として機能していく、こういう活動をやっていかないと学校を持続できないと思います。

井田：そうですね。言い忘れましたが、岩江中は新興住宅地で非常に不安定な部分があります。それで、もう少し学校の基本的な考え方と実践をつなげていくためには、地域の人の参加を促さなければいけないということで、学校の外に学習支援組織を作ったんです。これがかなり機能していて、学校へ要望を出すと同時に学校の要望も聞いてくれる、評議員制度よりもむしろそういう組織を作ることによって、状況に左右されない学校づくりに努力できます。それで、後半の2つの学校にはそういった組織を作ってきました。これは、これからの学校運営の中心的なテーマになってくるのではないかと考えています。

坂口：その通りですよ。地域の人から助言いただいて感じていることがあります。今、どこの学校でもホームページを開いていますが、地域の人いわく「先生、ホームページなどはあまり見ない、携帯電話なら見るよ」と言うのです。それで、学校のイベントの告知や検定試験のスケジュールなどを携帯電話のサイトに載せたら、利用度がグーンと伸びました。学校の先生だけでは携帯電話なんて発想には思い至りません。地域の人や保護者からは我々の気がつかないことがまだまだ提案されると思うし、将来的にきちんと発言する人が出てくるのではないかと期待もしています。

小島：羨ましいですね。東京の港区などは学校の選択制とか地域を外すという形になっているので、区の教育の将来的展望というのが示されない、思いつきのような形で新しいことを実施し、拙速にやり始めたために妙な形でつまづいたりしています。そういう面でも地域が上手く機能していません。逆に言うと、六本木の場合は学校独自で進めるしかないからすごくきついのです。平成12年に新しい校舎ができて、私は3年間しか校舎を使うことができなかったのが余計に中途半端なのですが、もう少し風土を含めて、井田先生のおっしゃった教育課程の一般化といったことを残せたら良かったのですが、残念ですけど、そこまで気がまわりませんでした。でも、学校施設は地域の方がどんどん入り込んで使ってくれていて、それは今後も変わらないと思いますけど。

井田：3年では短いですね。計画が途中で終わるのですね。

社会性を育む原点は人との触れ合い いろいろな形態の学校の可能性

長澤：今、新しい学校づくりをしようという時に、どのように学校づくりを進めていったらいいか、もう一つは教科教室型を採用したいというケースに対して、普通はどういうところに留意すべきかなど、アドバイスがありましたらお願いします。

坂口：私はそれに関して2つほど意見があります。1つは今、学力低下が問題視され学力の向上が問われていますが、私は、子どもに生活力や社会性をつけてやれるような学校でありたいと思っています。今まで学習環境や建物を考えるなどという発想は乏しく、集団を区切って教育するという発想しかありませんでした。人と人が関わる建物については、例えば教科教室のように、建物に限らず環境を考えるというのが大事だと思います。田舎の聖籠町で、海があるというのに、太陽が沈むところを見たことがないという子どもが30%近くいる。また、川がすぐそばを流れているのにトンボやバッタを捕まえたことがないということです。都会だけの問題じゃないのです。人間本来の力をつけさせるのが教育であるならば、その一番の原点は人や自然と触れ合うことだと思うのです。そのような中から学ぶ喜びを得られるのだと思います。それが1つです。それから、子どもたちを支える教職員集団の協働体制をとることです。中学校はとかく教科担任制が強調されるために、教職員同士が交流しにくい。ですから、一人の子を大勢の職員で見守り育ててあげるというような教職員の協働体制をとれるということが重要だと思います。これができやすい環境や建物であってほしいと思います。

小島：全く同感です。教育にはお金をかけなければいけない、それも即効性を求めるのではなく、将来を長い目で見た時、無駄金かもしれないけれども必要なのです。100年先を見通した日本の国の教育、子どもたちをどうしたいのかという方針をもっと強く打ち出すべきだと思います。文部科学省もゆとりを謳って今の学習指導要領を作ったはずなのに、学力が低下するという一方で、土曜、日曜、夏休みの補習も含めて、学力補充というようにコロコロと変わる、つまり一貫制がないというか施策のゆり戻しが多すぎます。そういう面でも、ある程度確固とした、人間として一番身に付けさせたいのは何か、生活力や人間性、健康を含めた、一番肝心なのは何かというのを再確認しなければいけないのではないかと考えています。それから、人間関係を構築できない教職員が多い、そういう一番肝心なところが抜けていると感じています。でも、マイナス面にばかり

考えても駄目なので、私が直接子どもたちに働きかけ刺激を与えながら運営してきたのですが、根本的には住民が運営に参画するような形がベストですね。そのために公立でいろいろな形態の学校ができて良いと思いますが、めざすものは共通でありたいと思っています。

井田：全く同感です。卑近な例でお話させていただくと、最初に桜中学をつくった時、職員会議に子どもたちの代表を参加させてみました。学校づくりというのは学校の都合を優先して行われてきましたが、もっと子どもや教科の都合でつくっていくほうが教科教室型の学校らしいと考えたからです。ちょっと乱暴な試みだと、一部の先生からは反対もあったのですが、テーマによっては子どもも職員会議に参加させてみることにしたのです。特に子どもの学習活動や子どもの利益に関わること、そういう部分については間接的に子どもに伝わるのではなく、こういった経過があることを子どもたちに直接知らせ、意見も受け入れました。そうした状況の子どもたちへの広がりには恐ろしく早いし、大きな信頼感をも生みました。そういうところから生まれてきたのがモジュールスケジューリングで、子どもが自分で自分の時間割をつくるようなところまで発展していきました。そうしたことは、決してメチャクチャなことをしているわけではなく、標準時間数等の教科のベースを守る中で、子どもにとって都合の良い時間割と教科の中味をつなぎ合わせることによって子ども自身の個性も伸びてきますし、子どもの学校に対する価値観や評価に対する考え方が変わってきます。その中で教科教室型であったことが非常に力を発揮し、子どもたちや学校運営を強くサポートしているという実感を得るようになりました。

小島：井田先生たちの実践の真似事を提示したから、六本木中では不十分だったのかな。こういうこともできるというところを示したかったのですけどね。

市町村合併に伴う学校再編の兆し 問われるこれからの学校のあり方

井田：話があちこちに飛ぶようですが、確実にこれからは学校再編がもう一回起きてくると思っています。現実に17年度を目途に市町村の合併が全国的に動くわけですし、その動きの中で当然元のままの小中学校であるわけがありません。さらに、少子化の傾向でもあるから、地域が合併した後、学校の統廃合の動きが必ず出てきます。その時に旧

来と同じ学校をつくるのではなく、これからあるべき学校の姿が問われてくると思います。そうするとハードでは教科教室型のあり方や学習方法・内容と合った学校建築のあり方も問われるだろうし、再構成後の学校教育のあり方自体、原点としての教育とは何かを考えていく中で、ハードとソフトの一体化とはどうあるべきかというのが、これからのテーマになっていくと思います。

坂口：実は、この機会に教えていただきたいのですが、三春にお邪魔した時、井田先生は教科教室型とおっしゃった。聖籠中の学校運営は教科教室型の運営というより教科センター方式の運営といってもいいのではないかと考えているのですが、教科教室型の校舎から教科センター方式というような言葉がどういう風に生まれたのでしょうか。

長澤：教科センター方式もタイプでいえば教科教室型です。教科教室型は戦後の一時期、教室が足りなかった時に、教室の利用効率が上がるというので、あちこちで採用されていたようです。でもそれが上手いかなかったということで、評価が定まってしまっていました。ただ、今の教科教室型は、当時と同じように教室の利用効率を上げることが目的ではなく、①先生が協力し合えるような施設づくり②予めメディアを用意しておけるので子どもに刺激を与える③それらを通して能動的に学習に向かう力を育む④人と人が関われる、この4つを同じように施設づくりの大きな目標にしています。逆にいうと、今までの施設はこれができないようなつくりだった。施設が教育に制約を与えていた部分が、ある空間を用意されることによって、それが開放されるというのが教科教室型の狙いです。ですから、昔の教科教室型とは異なるのですが、それが混同されている。建築の形態として、教科の教室が廊下に沿って並んでいるというよりも、教科の教室があって、そこに教科のメディアスペースがあったり先生の居場所があったり、それを教科センターという風に捉えています。教育研究所が出している雑誌で、昔の教科教室型と違うイメージを表す言葉として、あえて教科センター方式という言葉を用いたのが広がったんです。今日のお話からは、学校施設のあり方をお話する中で、教育あるいは教員の教育に向かう姿勢と分ちがたく教科教室型を捉えられているというのが伝わってきました。

長時間ありがとうございました。



教科教室制の変遷と学校運営等の課題



国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 総括研究官

屋敷 和佳

1. 「教科教室制」検討の視点

国語、社会、数学、英語の教科においても専用の教室を備え、生徒が毎時間教室移動を行いながら授業を受ける仕組みは、文部科学省の学校施設整備指針では「教科教室型の学校運営」と呼んでいる。

しかし、「教科教室型」と呼ぶ場合に、校舎の形態を指すのか、あるいは毎時間の教室移動を伴う授業展開の仕組みのことを指すのかははっきりしない。また、教育分野で言う「学校運営」には、教科教室に限定されない広い意味がある。そこで本稿では、そのような授業展開の仕組みを「教科教室制」と呼び¹⁾、また、そのために計画し整備された校舎を「教科教室型校舎」と呼んで区別しておく²⁾。

さて、本誌の前身である「教育と施設」誌は、平成6年(1994)の春号(44号)で本特集に重なる「教科教室型の中学校」という特集を組んでいる。そこでは、わが国最初の教科教室型中学校は、沖縄県の具志川東中学校(昭和56年[1981]新築)であると述べているが、これは正確ではない。すでに昭和25年(1950)には、すべての教室を各教科専用にした教科教室型校舎の建設事例がある³⁾。

また、中学校と同じく教科担任制である高等学校については、上記の沖縄県の中学校が新築される少し前から、従来の校舎のイメージを一新する教科教室型校舎が全国で10数校建設され、その幾つかは、建築設計者にとって重要な参考書である「建築設計資料集成」にも掲載された⁴⁾。

私が本格的に教科教室制について研究を始めたのは、この時期からである。筆者は新しい校舎の教育効果に期待をふくらませて高校を訪問した。しかし、ほとんどの高校がすでに教科教室制を取り止め、通常の学校と同じ特別教室制(普通教室制)へ移行していた。取り止めた高校の多くは、生徒指導に問題を抱えていたのである。

学校運営において、教科指導と生徒指導は車の両輪の関係にある。中学校の教科教室制の場合、双方がうまく連係を保ちながら機能し得るのか。また、そうであるためには、どのような条件・課題があるのか。以下では、戦後の教科教室制の変遷を整理しながら、検討していきたい。別の角度から見れば、施設(ハード)に対するソフト(運営管理)のマッチング(対応)を探ることでもある。

2. 国公立中学校における実施状況

平成15年度末(2004.3)現在、国公立中学校における教科教室制の実施状況は、筆者の調べによると、実施校42校、経験校は34校である。

経験校の34は、教科教室制を取り止めた⁵⁾時期が確認で

きている学校の数であり、短期間教科教室制を試行しただけの学校は含まれていない。したがって、実際の経験校となるとは実施校を遙かに上回ると見られる。

この他、教科教室制が行えるように校舎が整備されているが実施に移されていない学校も10校程度は存在する。

紙面の都合で実施校と経験校の一覧を掲載するわけにはいかないが、学校名を一部あげながら、教科教室制の実施期間と学校規模について概観すれば次のようである。

<実施校>

20年以上継続して教科教室制を実施する中学校は国立大学附属の3校(埼玉大学附属中学校[34年間]、神戸大学附属明石中学校[36年間]、香川大学附属高松中学校[30年間])である。公立学校の場合、最も長い学校で16年間継続されている(岩泉町立釜津田中学校、大館市立矢立中学校、浪合村立浪合中学校、いずれも昭和63年導入)。

実施校の学校規模は、いわゆる標準規模校(3学年計で12~18学級)は2割に過ぎず、6割は6学級以下である。

<経験校>

実施期間の最長は42年間に及ぶ(飯田市立飯田東中学校、昭和25~平成3年)。次いで長崎大学附属中学校の31年間(昭和29~59年)であり、公立実施校の最長16年間を超えるのは、この他、八鹿町立青溪中学校(昭和33~56年、24年間)、藤枝市立西益津中学校(昭和30~50年、21年間)、目黒区立第一中学校(昭和38~56年、19年間)、大宮市(現さいたま市)立大原中学校(昭和42~58年、17年間)である。

なお、経験校における教科教室制を取り止めた時点の学校規模は、標準規模以上であるものが8割を占める。

3. 導入年代別に見た教科教室制の特徴

次に、実施校と経験校の資料をもとに、教科教室制導入の背景や理由、教科教室型校舎の特徴を追ってみよう。

(1) 昭和20~30年代<教室利用効率追求の時代>

新制中学校の発足、その後ベビーブーム世代の中学校進学と続き、財政難や資材不足の中で校舎整備は難渋を極めた。そこで、効率のよい教室利用のために教科教室制が導入された。この時代、文部省は、建築モデルスクールとして、教科教室制の変形ともいえるブラッーン制を前提とした校舎の建設を推奨した⁶⁾。ブラッーン制とは、学級数と同数の教室を設け、全校の半数の学級が普通教室で授業を受けている時間帯は、半数の学級は教室移動をしながら教科教室で授業を受ける仕組みである。

しかし、堀越中学校、飯田東中学校、西益津中学校のように、例外的に経済的理由ではなく、専ら教科指導の充実

等の教育的な観点から教科教室制を導入した事例もある。飯田東中学校、西益津中学校は、既存校舎の普通教室を教科教室に変えて実施した。当時、学習指導要領一般編には「試案」と付記され、教師の手引きとして位置づけられていた時代で、その内容は生活経験主義的色彩の濃いものであった。

教室の利用効率を上げることを目的とした学校は、やがて生徒数の減少に伴い、教科教室制を解消した。

(2) 昭和40～50年代＜教育機器導入の時代＞

昭和33年（1958）に学習指導要領は改訂され、文部省告示となり、系統性が重視された内容となる。さらに、昭和44年（1969）の学習指導要領は、教育内容の現代化を目指した。

このような変化の中で、OHP、テレビ、アナライザー等の教育機器を活用した個別化教育が注目され、教育工学を取り入れ教科指導を充実するというねらいで教科教室制は導入されるようになった。導入校でもティーム・ティーチング（TT）が試みられた。

この時代の教科教室型校舎の特徴の一つは、各教科の教室群の近くに各教科の準備室（研究室）が設けられ始めることである。

(3) 昭和50～60年代＜沖縄県における革新的取り組み＞

昭和56年（1981）には沖縄県で、学校建築史上のエポックともいえる、空間構成が従来とは全く異なる校舎が建設された。教科別のオープンスペース（教科メディアセンター）、各教科の準備室（研究室）、各学級のホームベースを設けたものであった²⁾。具志川市立具志川東中学校と沖縄市立安慶田中学校がそれである。

その後昭和60年代前半までに、沖縄県では合わせて5校の教科教室型校舎が整備されたが、多くは学校建築研究者が関わった設計であった。そのうち4校では、ランチスペースにロッカーを置き、ホームベース兼用とされた。

また、教科教室は、学活（LHR）や道徳などの授業のためにホームルーム（HR）教室としても使用されるが、沖縄県の先進事例では、ホームルーム担任が教科担任として専ら使用する教科教室をHR教室に割り当てた学校もあった。つまり、学年でまとまったHR教室の並びではなく、学年が混在するHR教室の配置だったのである。このように、教科指導の最先端を追求した校舎であった。

文部省が補助基準に多目的スペースを導入する前後の時期である。

(4) 昭和60年代～平成一桁＜小規模校を中心とする開発＞

特に、小規模校において教科教室型校舎が新たに開発され、教科教室制が導入されるようになった。複数の中学校

で、教科教室型校舎を整備したのは、岩手県岩泉町と福島県三春町であった。三春町の地域あげでの学校施設整備、学校改革の成果は、関係者に鮮明な記憶となっている。

他方、標準規模の中学校においても、新改築に合わせて教科教室制の導入が進められた。しかし、この時期、教科教室型校舎を建設しながらも教科教室制を実施していない学校、さらに一時的な試行で終わった学校も出てきた。

(5) 現在＜多様な教科教室型校舎の開発＞

平成一桁後半からは、様々な形態の教科教室型校舎が出現してきている。第1に、空間的には生徒の居場所がないことが問題とされ、ホームベースの整備に工夫が見られるようになった。例えば、教科教室に隣接してホームベースを配置したり、小ぶりながらもHR教室を別途確保する場合もある。第2に、教科教室と多目的スペースのつながりを工夫するようになってきた。第3に、既存校舎の余裕教室を改修（改造）したり、普通教室を転用して教科教室制を導入する事例も現われてきた。

以上、教科教室制導入の歴史をたどってきたが、明らかに学校施設・設備の開発と結びついていることが理解できるよう。学校施設・設備の進化により、教科教室制導入は拡大したのである。

4. 教科教室制の利点と問題点

しかし、現在全国で40数校の実施となると、普及したとは決して言えない。利点と問題点を検討する必要がある。そこで、平成8年に行った調査結果³⁾に触れておきたい。

(1) 教科教室制の利点

当時の実施校と経験校計37校のアンケート結果（自由記述）によると、利点の第1は教科指導（経営）面にある。具体的には、①各教室において教科にふさわしい学習環境が整備できる、②そのため学習意欲が高まる、③授業準備がしやすい、④多目的スペースの活用等により、課題解決的な学習や個別指導が可能である、などである。

第2は教室移動の効果であり、①教室移動が気分転換になり、学習意欲が高まる、②学級・学年を超えた交流が活発になる、という指摘があった。

(2) 教科教室制の問題点

これに対して問題点は、4項目にまとめられる。

第1は教科経営に関する内容である。①教師の意識改革が必要、②教科に応じた雰囲気づくりが難しい、③さらにオープンな教室は騒がしいなどである。

第2は、学年・学級経営に関するものである。①学級の仲間が集まる場所がない、②学級やHR教室への帰属意識が薄い、③HR教室は教科教室と併用のため時間割編成が



大変であり、また使いづらい、などである。

第3は、最も多くかつ強く指摘されている教室移動に起因する問題である。①移動時の混雑、移動に時間がかかる、②生徒が教室移動を負担に感じる、③生徒の掌握が難しくなる、④持ち物の運搬や管理が大変である、⑤机や椅子など物を大切にしくなくなる、などがある。

第4は、教育行政に対する注文で、教科教室制実施のための理解・支援が不十分であるという指摘である。

(3) 教科教室制取りやめの理由

利点が教科指導に集中する一方で、問題点の大部分は生徒指導に関わる内容であった。結局、取りやめの主たる理由は、教科指導を中心とする教科教室制の利点を生徒指導上の問題点や課題が上回ることにある。

この項目に回答した学校は、先の年代区分で昭和60年以前に導入しており、一時代昔の教科教室型校舎を持つ学校である。しかし、筆者が行った聞き取り調査等からは、その後整備された教科教室型校舎においても教科教室制を導入しない理由、あるいは試行してやめた理由も、ほぼ同じ構造といえる。

5. 教科教室制の評価とその要因

では、どうすれば教科教室制は機能するのか。次に、教科教室制が生徒に高く評価された事例⁹⁾を紹介したい。

(1) 8割の生徒が教科教室制をプラス評価

筆者らは、平成11年度に新築されたG中学校を対象に、14年度(3学年計で12学級)まで4年間に渡り、生徒にアンケート調査を実施した。11年度当初には、教科教室制に対して5割台というプラス評価(「大変よい」と「まあよい」の割合)であったが、年々評価がよくなり4年目には8割の生徒がプラス評価をするまでになった。

(2) プラス評価の要因

その要因を筆者は次のように考えている。

第1は、学習の質を高める授業である。G中学校では午前中65分授業を行い、自分で考え、まとめさせるなど問題解決学習志向の授業を展開した。習熟度別授業やTTも取り入れた。授業評価も行っているが、授業が充実していると評価する生徒の割合は7~8割台にのぼる。つまり、教室移動する意味のある授業が行われたといえる。

第2は、移動負担の軽減である。休憩時間を15分として移動に余裕を持たせるとともに、ロッカーを学年別に各階の中心に配置して、毎時間の荷物の出し入れを容易にした。また、校舎は多目的スペースや吹き抜けを軸にコンパクトに設計されており、移動距離が短くてすむ。さらに吹き抜けは、生徒の位置や学校全体を分かりやすくさせ、心理的

に安心感もたらしめている。

第3は、学年経営の工夫である。G中学校では、教科教室制の下では学級経営はある程度後退させざるを得ないと考え、学年経営重視へシフトさせた。学年経営部の密な連絡、他学年の教師との情報交換、学年ふれあいコーナー(多目的スペース)を使った学年単位の総合的な学習の実施など、学年全体できめ細かく生徒を指導する体制を作り上げたのである。

6. 教科教室制を機能させるための条件・課題

(1) 学校運営上の課題

先述の調査研究とこれまで筆者が行った訪問聞き取り調査等から、教科教室制を機能させるための学校運営上の要点として、特に次の2点が重要と考えている。

第1に、授業及び教室環境の充実である。くり返しになるが、生徒が教室移動をする意味があると感じる内容でなければならない。また、同じ教科の教師の連携・協働も大切である。第2は、教室移動により生徒把握が難しくなる中で、従来とは違った生徒指導体制の構築である。教職員が意思疎通を十分図り、学校全体で生徒を見守り適切な指導をすることが不可欠といえよう。

つまり教科指導および生徒指導に関して、通常の学校とは違った高度で複雑な学校運営体制が必要であり、しかも有効に働くことが鍵となると見ている。G中学校は、見事にそれを克服し、成果をあげたといえる。中学校教育の一つのブレイクスルーを果たした。しかし、全国どこの学校でもそれが可能とは思えない。

特に、授業・教室環境に関しては、そもそも授業準備や授業研究を十分に行う時間が教師にあるのかという問題がある。特に、生徒の問題行動等への対応に迫られる学校ではそうであろう。また、わが国の中学校には部活が盛んな学校が少なくない。部活指導のために、授業準備等に必要な時間が制約されることもある。

次に、多感で精神的に不安定になりがちな中学校という時期の生徒指導は、問題行動を起こさせないためにも、人間性を高めるとい意味でも極めて重要であることは言うまでもないが、教師の多くは「生徒指導が行き届いた上で教科指導が成立する」、そして「生徒指導の基盤は学級」と考えている。このような状況では、教科指導や授業をより重視することによって学校改善を図ろうという意図を持ち、さらには学級のまとまりに少なからず影響を与えると考えられる教科教室制の導入には、教職員はあまり賛成しない。特に、学校の「荒れ」を経験した教職員ほど反対の声は強い。

教科教室制の導入には、教職員の意識改革が必要であると言われるが、その意識改革の一つが先述の「生徒指導が行き届いた上で教科指導が成立する」という考え方ではないだろうか。生徒指導重視の考え方から、教科指導も生徒指導も共に重視する意識構造へと変われるかが問われているといえよう。

(2) 教育行政（教育委員会）の課題

公立学校の場合、教科教室型校舎の建設や教科教室制の導入の決定は、教育委員会が行う。

教育行政の課題の一つは、教科教室制の導入と設計に当たって、関係者、とりわけ意識改革を迫られることになる教職員の意見を十分踏まえることである。教科教室型校舎の利点と問題点、整備する学校の状況・条件を十分検討して、教科教室制導入について最終決定をする必要がある。

課題の二つめは、校舎を建設する際に、教科教室制にとってふさわしい学校施設の計画・設計になっているかを十分検討することである。実際、設計の巧拙によって、生徒・教職員に好評な学校がある一方で、使い方に苦勞し、教科教室制の実施に大きな支障を来している学校も見られる。計画・設計は、教科教室制実施の成否に大きく影響し、円滑な学校運営を保障する内容でなくてはならず、その責任は教育委員会にあるといえよう。

三つめは、学校への支援（条件整備）である。教科教室制が成果を上げるためには、教科指導、生徒指導ともに、通常の学校以上に工夫と労力を要することはすでに述べた。したがって、教職員の加配が不可欠といえ、実際、かなりの学校で加配が行われているのが実情である¹⁰⁾。

人的面の他には、各教科の学習環境の整備に関わって、教育機器、教科関連図書等の備品の整備も見逃してはならない。その有無が、教科教室制では決定的な意味を持つと考えられる。さらに、教室移動が前提となっているので、校内の連絡網の整備も欠かせない。

(3) 研究上の課題

教科教室制は、条件がそろえば大きな成果が得られるが、そうでなければ期待通りにはいかない、リスクもあるというのが筆者の捉え方である。本稿では、その条件を十分に体系立てて明らかにするまでには至っておらず、今後の研究課題として残されている。

おそらく、これからも徐々に教科教室型校舎の整備は進むであろう。教育改革に沿った教育環境整備の推進という観点からは望ましい。ただし、その際に注意を払っておくべきは、華やかな校舎の整備の一方で、ひょっとしたら起こりうるかもしれない影の部分ではないだろうか。

教科教室制導入によって不登校の生徒が減ったとの報告

も聞くが、他方で、「友達ができなく、毎時間の教室移動が辛い」と打ち明ける生徒もいる¹¹⁾。筆者が行ったアンケート調査の中にも、「教科教室制にうまく適応する生徒と全く適応できない生徒に分かれてしまう」との生徒の意見もあった。教室移動のため、教科教室制における学級集団は従来の学級集団とは違った様相を呈しているようである。教科教室制がもたらす様々な作用、そして教科教室制の下での学級の在り方について検討を深める必要性を痛感している。

〔注〕

- 1) 「教科教室制」という用語は、昭和30年度の藤枝市立西益津中学校の教育計画書「進動の姿」等に見られる。
- 2) 本特集の「教科センター方式」は、大きく見れば教科教室型校舎の一形態と捉えられる。
- 3) 堀越村立堀越中学校（三上吉司「実践の中学校経営－教育機器と教師群による経営－」やぶかんぞうの会〔弘前市立第二中学校内〕、1974、20-21頁）
- 4) 日本建築学会編「建築設計資料集成6 建築－生活」1979、丸善、128-130頁
- 5) 特別教室制へ移行した。
- 6) 例えば、文部省「文部時報 第875号」（特集：文部省建築モデルスクール）1950、文部省文教施設部編『学校建築計画図集』彰国社、1951
- 7) メディアセンターの周りに教科教室が配置されており、「教科センター方式」のはしりといえる。
- 8) 屋敷「中学校・高等学校における教育多様化のための施設・設備の改革と課題に関する研究」科研報告書、1997、64-69頁
- 9) 屋敷「中高一貫教育校における教育環境の整備と効果－G中学校教科教室型校舎の事例分析－」国立教育政策研究所、2003
- 10) 例えば、本誌前号の大洗町立南中学校（6学級）の記事では、4名の教員加配がきめ細かな指導に役立っていると述べられている。（文教施設協会「文教施設」第14号、2004、78頁）
- 11) 最近のインターネット掲示板に掲載。

屋敷 和佳



1955年広島県生まれ。東京工業大学建築学科卒、東京工業大学大学院社会開発工学専攻修了。国立教育研究所研究員、教育計画室長を経て、2001年より現職（工学博士）。

専門は教育計画、建築計画。主要研究

報告書に「都道府県における高等学校の再編計画に関する研究」「少子時代の学校教育環境整備に関する研究」「学校統合および学校選択制導入に伴う教育環境の充実と課題に関する研究」など

教科センター方式の中学校をどのように設計するか

～桜中学校と聖籠中学校について～



放送大学教授 香山壽夫建築研究所代表

香山 壽夫

1. 中学生にとっての建築空間

様々な教育施設のうちでも、中学校の建築は、とりわけ難しく、またそれ故に、建築空間が生徒達に対して与える意味、役割は大きい。教育において、あるいは広く人間の成長に対して、建築の働きが中学生においてとりわけ大きい、と言いかえることもできよう。中学校建築の設計の困難さも、面白さもそこにある。

建築とは、決して機能としてとりあげることでできる様々な個別的要求を満たすだけの道具ではなく、ひとりの人間が、自己と自己をとり巻く多様な世界との関係を定める最も根底的な枠組みである。建築によって人間は、自己と自然環境の関係を定め、又自己と他人、すなわち社会環境の関係を定める。

建築空間とは、先ず人間の発達の初期、幼児期において、そのようなものとして存在していることを、発達心理学者のジャン・ピアジェは示しているし、人間の文明の初源においてもそうであったことを、人類学者のルロワ・ゲーランは教えてくれる。全てに建築は、そのようにその本質において、人間の世界の認識の枠組みをつくり上げ、社会の秩序の骨組みを形成するものだが、そうした力が、とりわけはっきりと求められ、強く現れるのが、中学生に対する建築空間ではないか、と私は考えている。

建築を設計する者は、そのような建築に求められている本質的な力を、自らの感性として持っていなければならない。専門家とは、様々な技術的な特殊な知識・経験を持つことによって社会に奉仕する者のことであるが、しかし常にその基底に、専門技術の向かうべき方向を確かめるための感性を備えているはずであろう。建築の空間を設計する専門家としての建築家も、従って、教育施設を設計する時には、特に中学校を設計する際には、中学生時代の自分を思い起こしつつ、その年齢の人間についてそれぞれの理解を持っているにちがいない。

私は、絵を描くことに熱中していた、自分の中学生時代を思う。私は、新潟平野の北端にある小さな町で中学時代を過ごした。図画教室は、私の「ホーム・ベース」だった。それは、新設された新制中学校の校舎の、端部におかれていて、三方に窓があり、窓の外は広い桑畑だった。放課後はいつも静かで人気はなく、がらんとした床の上に散っていた淡い光がいまだに鮮明に記憶の中に残っている。絵の具が手に入りにくい時代だったので、主として鉛筆デッサンやクロッキーばかりしていたのだが、それにも飽きると、桑畑を横切って2キロぐらいの所にある大きな川に行き、泳いだものだった。秋になって増水し危険になると、かえ

って挑戦的に気分になって濁流に飛び込んだりした。それでもできない季節になると、ただ、広い河原の石ころの上にひとり寝そべって流れる雲を見て時を過ごした。

人は誰にも自分の「炉端（Hearth）」を持つ、と文化地理学者であるトゥアンは言う。炉端とは、「ふるさと」あるいは自分の「拠点」と言い直してもいい。自分の帰る場所、ふるさと、わが家を必要とするのが人間なのだ。しかし同時にまた、人間は「宇宙（Cosmos）」を必要とする存在だ、とトゥアンはつけ加える。自分を越えた何か、ふるさとを離れ遙か彼方の何か、それを同時に追い求めるのが人間なのだ。人はそのように、その本質において引き裂かれている。そしてその分裂が、最も露わにされて、その人を不安定にするのが、中学時代と言っていいだろう。未来の希望にむかって輝きながら、自分の内部によんどんでいる暗闇に恐れおののいているのが中学生だ。彼らは、自分の「炉端」に必死にしがみつकिながら、同時にそこから逃れて「宇宙」に飛びだそうと試みる。図画教室は私の「炉端」であり、校庭に続いて広い河原は私の「宇宙」だったのだろうか。

「拠点」をつくってやること、そこにまぎれもなく、自分が所属し、常に回帰して自分を確かめることのできることで、それが中学生にとって先ず必要である。しかしそれと同時に欠かせないのは、その拠点から脱出し、広い世界へ、広い宇宙へ飛翔する道筋である。拠点は、単に閉じこもるための場所であってはならない。宇宙は、単に自己から逃避する手段であってはならない。そうではなくて、拠点は、広い宇宙があってこそ、その存在の独自性が確かめられるし、宇宙への飛翔は、確かな拠点がある場合のみ真に可能なのである。

このことは、教科センター方式の中学校において、まさに求められていることだ、と私は思う。

2. 単位空間（ルーム）の個性をいかにつくるか

教科センター方式の学校は、それまでの学校のように、クラス数だけの普通教室があり、それに加えて、理科、美術、音楽といった特別教室があるという方式と違って、全ての教科が、それぞれの教室を持つということが基本であるから、それぞれの教室がその内容にふさわしい空間であることが求められる。これは、その方式を知っている人なら誰しもわかることであるし、当然考えることだ。しかし、そのために先ず考えねばならないことは、生徒達の拠点をどのようにつくるべきか、ということである。教科教室から教科教室へと移り歩く生徒達が、自分の属する本拠地、自分の帰るべき場所、安心して落ち着ける空間といえるも

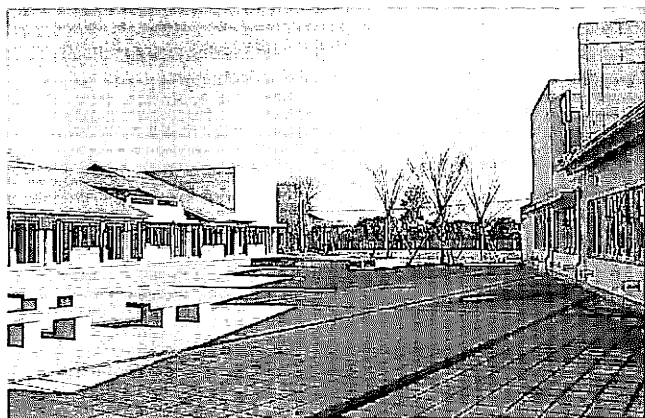


写真1 三春・桜中学校 中庭全景

のが確保されていなければならない。実際、新しい中学校が教科センター方式で構想された時、設計者に対して、教師そして父母達が第一にぶつける不安は、学級というまとまりが希薄になるのではないか、生徒達の落ち着きが無くなってしまうのではないか、という問題である。1989年に始められた三春町の桜中学校の設計においては、先ず先生方がその疑問を大きくかけ、討論が繰り返されたし、その10年後、1998年に始まった聖籠中学においても、先生方に加えて父母達がそのことを真剣に問いかけた。

三春の桜中学校は、全校6クラスという小規模校である(写真1)。建物の構造形式は、鉄筋コンクリート造の壁体の上に木造の小屋組がのる複合構造である。この木造の小屋組の屋根裏が、生徒達の学級単位の拠点、すなわち「ホーム・ベース」と呼ばれる空間となっている。木造の小屋組をそのまま露し、高窓から光が入り、その下にある教室を見下ろす、幅7m、奥行き4m程の空間で、ここに生徒達ひとりひとりが自分の持ち物を入れる小さなロッカーがしつらえられている。クラス毎の連絡や図表等の掲示できる壁面もある。このこじんまりした居心地の良い空間は、生徒達にとっても好まれた。

教科教室は、社会、国語、数学、理科、調理、音楽、そして美術・技術の7つで、数学と理科、社会と国語、音楽と美術・技術がそれぞれ教材室とオープンスペースを共有し、調理は食堂につながって、オープンスペースを共有し、図書室は社・国のオープンスペースにつながるかたちをとって、ただ特別教室が並ぶのではなく、ゆるいいくつかのまとまりをつくるように工夫されている。また、理科、美術・技術、図書室、食堂は、建物の四隅に配されていて、それぞれの授業に求められる外部空間、テラス、庭等を持つようになっている。

ホーム・ベースが生徒の拠点となるだけでなく、それぞ

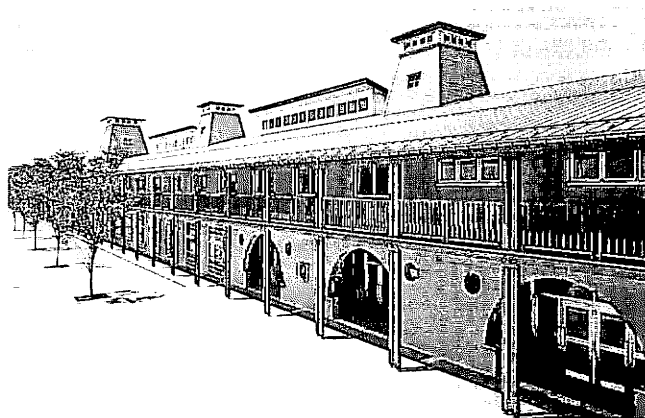


写真2 聖籠中学校 南側全景

れの教科教室が、その教科を好きな生徒にとって、もう一つの拠点として親しまれる空間とならなければ、教科センター方式の学校として成功しているとはいえないだろう。

聖籠中学校は、桜中学と対照的な大規模校で、全校で18クラスある(写真2)。ここでも生徒達の拠点として、教室とは別にホーム・ベースとしてやはり木造屋根で包まれた8m×5m程の空間がつくられている。ここに個人用のロッカーやベンチがあり、学級毎の活動も行われるようになっている。この中学校のホーム・ベースの大きな特色の一つは、その配置の仕方、学年の異なる生徒達の間の、タテの交流も豊になるよう、二つの学年のクラスが混じった六つのグループにまとめて、ホーム・ベースを配していることである。ホーム・ベースは二つの中庭を取り巻いて、それを見下ろすように配されているが、それによって、二つの中庭自体も、学校空間の中心となり、生徒の生活の拠点となるように意図されている。

学校の規模が大きいので、教科毎の教室も一つではなく多数になる。数学、国語、社会、英語はそれぞれ4つの教室があり、理科は三つ、音楽は二つ、美術、工作、技術、家庭はそれぞれの空間を持つようになり、教室毎の特徴もつくり易いが、一方、教科と教科の重なり、総合性も生まれるように、社会と理科のオープン・スペース(「ラウンジ」とこの中学校では呼んでいる)のつながりに「環境ラウンジ」、社会と英語のつながりに「国際理解のラウンジ」をつくったりしている。こうした試みも、教科教室の空間自体も、生徒達に愛され、帰属の持たれるような拠点にしたいという意図から出たものである。

3. 全体のわかりやすさをいかにするか

空間の求める特性をかたちにし、そしてそれらの相互の関連として求められるものを図にしていくと、結果的に建

物全体は、複雑で迷路のような空間になりがちである。教科センター方式の学校では、特にそうなりがちである。あるいは、それを無理に図式的にすると、反対に、機能のダイアグラムをそのまま建築にしたような、味気ないものとなる。こうした誤りを避け、空間の個性を出しつつも、全体としてわかり易く、かつ面白いものにできるか、これが次の問題である。

明快な空間構成、これは良き平面より生み出される。建築家ならずとも、誰しも、平面計画に力を注ぐのは、その故である。平面は建築の基本である。しかしながら、良き平面は、平面のみをいじくっていても生まれ得ない。良き平面をつくり出すためには、先ず、空間構成の基本をつくり出すシステムがつくられていなくてはならない。この空間構成の基本システムは、いろいろなかたちで定め得るが、私は、断面形によってその最も大切な部分が規定される、と考えている。それは、空間の奥行と共に、上下の寸方関係、構造形式、主な素材といった要素を同時に示すもので、古くからの建築用語では、矩形図（くけいづ、かなばかり図、あるいはWall-section）と呼ばれているものに近い。

桜中学校では、鉄筋コンクリートのフレームが、基本的

な教室空間を構成し、その上に木軸がかぶさる（図1）。小屋裏にホーム・ベースがつくられる共に、その上で小屋はさらに持ち上げられて小屋根をつくり、そこから光が入り込む。吹抜けのオープンスペースで階段が上に昇る一方、小屋を支える柱が落ちてくる。また建物南側外面では、軒下に柱が並んで柱廊となる。コンクリートと木の対比は、さまざまな細部に及んで、質感とスケールを互いに際立たせながら、さまざまなバリエーションを要求される学校建築に対応することができた。

聖籠中学校でも、建築は全て2階建におさえられ、1階が鉄筋コンクリート造、2階は大断面集成材を用いた木造という、桜中学と共通する複合構造が用いられている（図2）。木造の小屋組は、その内にホーム・ベースを包みこみ、また上に持ち上げられて、高窓となって、光や風を導き入れ、特にひとつは高く塔となって、越後平野の遠くからも学校の存在を示し、その上からは、日本海と佐渡を望むこともできる。上下の階は、必ず吹抜けによって垂直方向にも結ばれている。これは、風を通すだけではなく、生徒達の動き、視線が常に活発に交流するように意図されたものである。

この2つの中学校が、共に木造と鉄筋コンクリート造の複合構造を用いた2階建になっていることは、それはたまたま両者が田園地帯の広い敷地を持ったことに基いているからであって、私は決してそれを固定的な標準型と考えているわけではない。居住密度の高い、都会の敷地で、3、4、5階建の場合には、またそれに適した断面形があり得ると私は考えている。（実現はしなかったが、そういう案をつくってみたこともある。）

いずれにせよ、こうした基本的な断面構成を考えた上で、様々な平面のスタディが始まり、その平面形のスタディが、断面形を修正していく、というプロセスで、基本計画は進んでいくことになる。

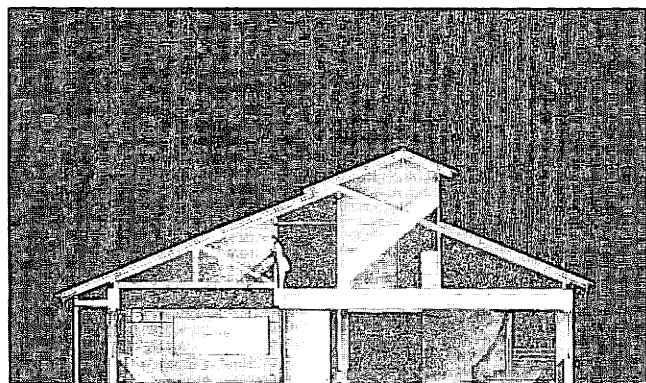


図1 桜中学 断面図

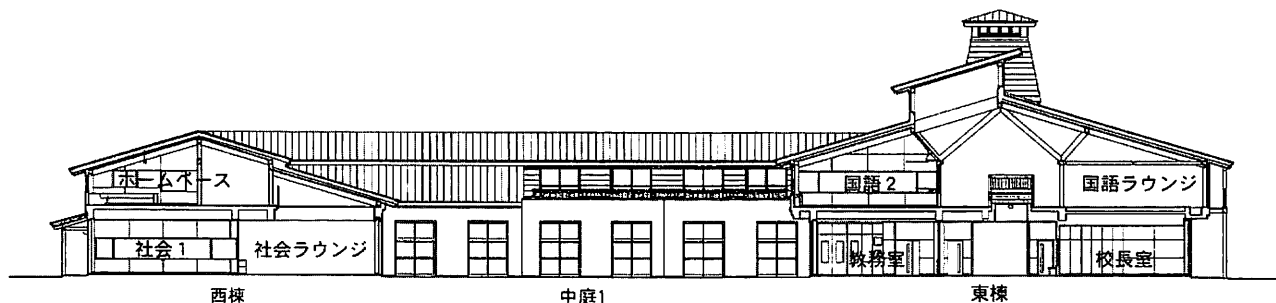


図2 聖籠中学 断面図

桜中学校は、三つの棟が歪んだ「コの字形」の平面をつくって、中庭を開んでいる（図3）。中央の棟は、防火区画をつくるために、2階まで鉄筋コンクリート造で、一層目に昇降口と校務センター、そしてそれ等を両端から食堂を図書室がはさんでいる。そしてその上に、英語教室（AV室）、コンピューター室が配され、それに沿って中庭を見下ろす広いテラスがある。中央から伸びる二つの棟の一方には、美術・技術、音楽、調理等、音を出す技術的な教室がまとめられ、中庭をはさんだもう一つの棟に、社会、国語、数学、理科の諸教室がまとめられている。この二つの棟の2階には先に述べた6つのホーム・ベースが配されているが、全て小さなテラスを持っている。それぞれの棟の端部に置かれている理科室と、美術・技術室の上には、2階まで吹抜けた高い天井が与えられて、多様な実験や作業

に応じる用意がなされている。中央の棟から、中庭の反対側、すなわちグラウンドの側に、給食室が突き出ている、その先にアリーナ（体育館・講堂兼用）が伸びている。昇降口の前は、ゆったりした階段の広場になっている。生徒達は、朝日に向かって登校し、夕日に向かって下校する。

聖籠中学校の平面形は、二つの正方形の中庭を囲む「日の字形」をしている（図4）。平行している二つの棟が、中央と両端の3ヶ所で、連結されていると言い換えてもいい。この三つの連結棟と、西側の棟の2階に、先に述べた三つづつまとめられたホーム・ベースの6つの群が置かれている。西側に1階は社会と理科のゾーン、中央の連絡棟の1階は英語のゾーンである。東棟の2階は、数学と国語のゾーンで、その端部が図書室であるが、それはその下に配されたコンピューター室と一体となるよう上下につながって

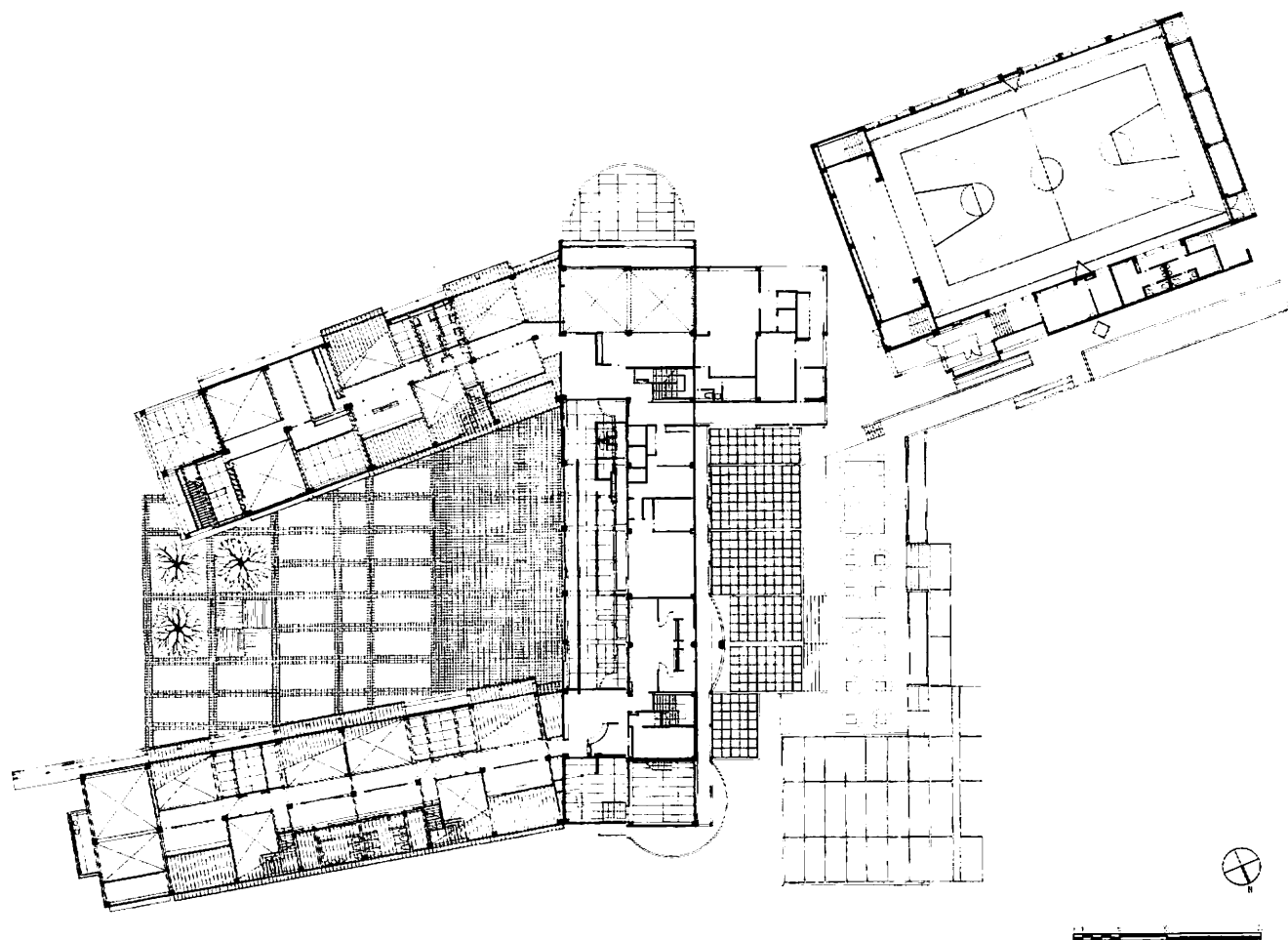


図3 桜中学 各階平面図

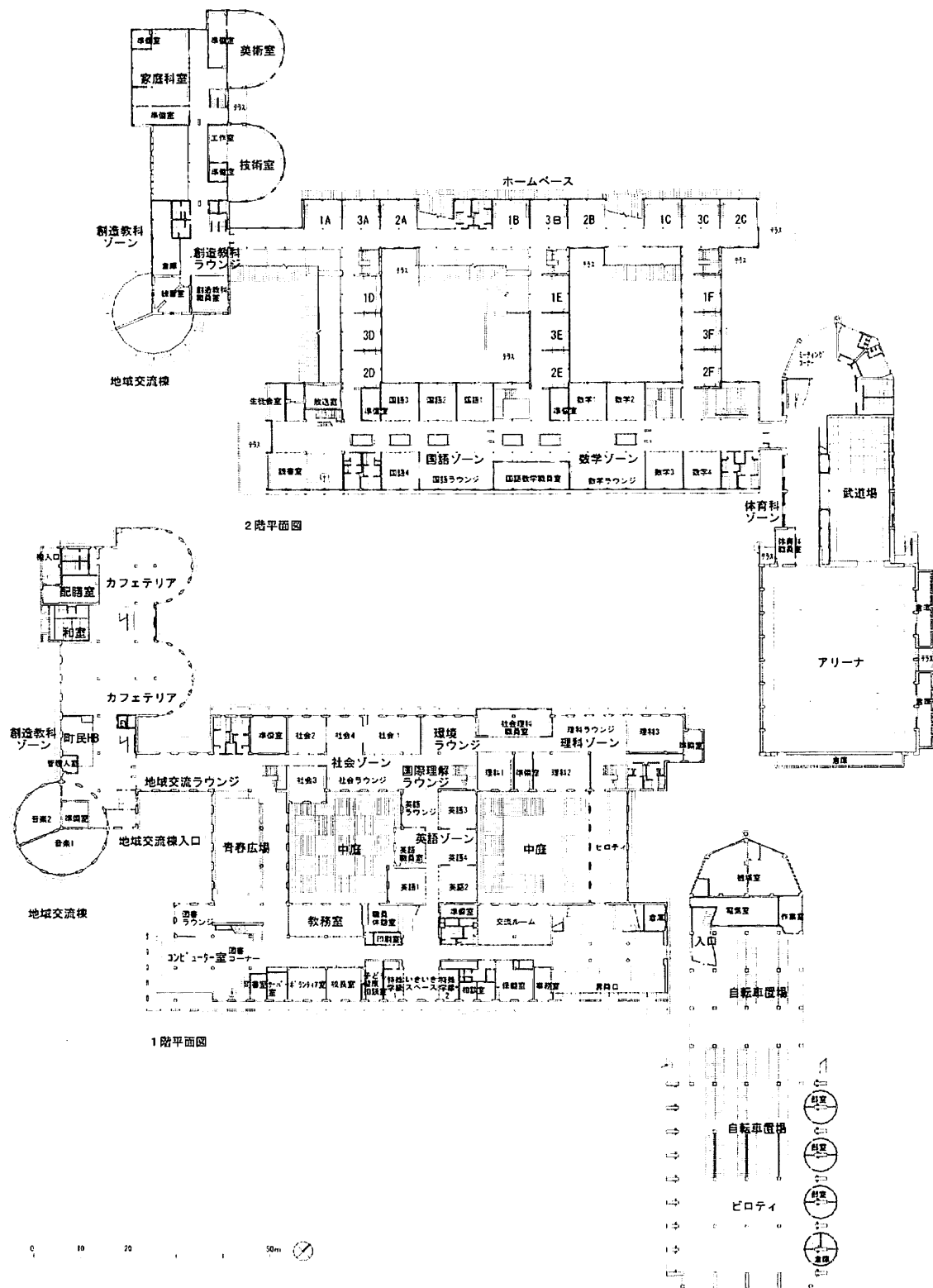


図4 聖籠中学校 平面図

いる。この東棟の1階には、教務室、校長室、事務室、保健室、相談室、特殊学級等が置かれている。昇降口は、この棟の東側に沿って長く伸びる柱廊（雁木）の一番奥にある。登校中の生徒達に、学校全体の活動が目に見えるように、また強い北風と雪の中を登校してくる冬には、この雁木の下で一息つけるように考えたものである。この雁木の奥に体育館があり、そして東側に、グラウンドが広がる。この二つの棟の南側に、音楽室、美術室、技術・工作室の棟が、半円形の空間を連ねる形で伸びている。この1階に広い食堂がある。この棟にはまた、地域の人達が、学校の教育を支援するための「地域交流センター」が置かれ、ここには町民が何時でも自由に出入りできる入口が設けられている。

聖籠中学校の西と東の棟は、建物の幅が広く、中廊下の両側に諸室が配される基本平面でできている。その中廊下に、1階と2階の空間を上下に貫く、吹抜けが必ず設けられていて、そこを光と風が通り、視線が交流することは、先に述べたとおりである。しかしそれに加えて、東棟の昇降口につながる生徒ラウンジの大階段ホールや、南側地域交流ゾーンにつながる連結棟の青春広場等、いくつかの大きな空間が生徒の動きの結節点に配されている。これ等の空間は、移動を生徒達にわかり易く、楽しいものとするし、それだけでなく、その空間自体が、留って独自の居心地を持つ場所ともなる。二つの中庭自体も、大きくとらえるとそういう空間であって、この大規模な建物の中心にあって、全体の構成をわかり易く、かつ光と風の入る快適なものとするだけでなく、その空間自体が、言わば屋根のない大きな部屋となって、この学校全体の中心的な拠点になることを意図したものである。

中学校の設計の要点は、再び冒頭に述べた問題に立ち返って、生徒達それぞれが自ら望ましいと思われる拠点を空間的に用意してやることにある。そしてそれに続けて、その拠点が、閉じた断片に終わることなく、より広い全体に開かれ、つながっていくように、全体と統合していくことにある。言いかえれば個性をもった内部空間の単位が、適切に形成され、そしてそれらが互いにつながり、重なりあい、更にそれらの内部空間が、外部空間とつながり、交流しあうようにつくられることである。

その具体的なかたちに標準モデルはなく、その場所、その時、そして使う人々に応じて、建築家が見出し、生み出

していくものである。といって、建築家のひとりよがりな、かたちの遊びは、教育を活気づけるどころか、むしろ荒廃させる。かつての文部省の規格的な校舎標準設計は、すでに過去のものとなった。しかし、新しく求められている学校建築は、決して建築家の気ままな遊びからつくられるのではなく、教育者や市民を含む多くの人達との、誠実な応答の上になった、真の創造力のみがつくりだし得るものである。◆



香山 壽夫

1937年生まれ、東京都出身
東京大学建築学科卒、ペンシルヴァニア大学大学院卒、東京大学名誉教授、放送大学教授、工学博士、建築家、アメリカ建築家協会名誉会員、香山壽夫建築研究所所長
■著書
「建築意匠講義」東大出版会（1996）
「建築家の仕事とはどういうものか」王国社（1999）
「ルイス・カーンとはだれか」王国社

（2003）他
■作品
三春町立桜中学校（1991）／彩の国さいたま芸術劇場（1994）／関川村歴史資料館（1994）／聖籠町立聖籠中学校（2001）／東京大学弥生講堂（2001）／函館トラピスチヌ旅人の聖堂（2001）他
■受賞
日本建築学会賞、村野藤吾建築賞、建築業協会賞、他

町民が創る中学校

～教科センター方式を町民が選択～



新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校教頭

高口 和治

I. はじめに

筆者の聖籠中学校建設にかかわる立場と4年間の在任期間中に何をしたかを簡単に説明してから内容に入ることにする。平成10年の異動で、聖籠町教育委員会学校教育課指導主事になった際に、手島聖籠町教育長から、次の指示があった。

- ・教科センター方式の中学校の学校運営研究
- ・設計事務所との内容的な打ち合わせ
- ・先生方との話し合い（幼稚園、小学校、中学校の連携を含む）
- ・地域住民との話し合い

平成13年4月開校が決定しており、平成10年の夏には平面図をあげて、10年度中には着工したい意向であった。筆者は、教科教室という言葉も聞いたことがなく、ともかく理解するために、4月17日には、教育長とともに三春町の武藤元教育長、井田岩江中学校長の話を聞きに伺った。

○平成10年度、11年度

町民が作った基本構想（後述）と教科センター方式の学校運営のあり方、建築家が考える教科センターの学校、さらに、聖籠町の子どもや地域の実態とをすりあわせることが仕事の中心であった。三春町の岩江中学校や沢石中学校、千葉市の打瀬中学校などは、1週間単位の滞在を何回か繰り返した。また、アメリカにもミドルスクールやハウスの考え方などを学びに行ってきた。

○平成12年度

平成10年度からかなり荒削りな教育内容・方法ではあるが、先生方と教育課程を検討してきた。平成12年度は、かなり細かな運営方法を坂口校長を中心に考えていただき、それは、すぐに建築家にフィードバックされ、建築に具体的に生かされていった。聖籠町では、建築側には建築計画に専門の長澤悟先生が存在しているのに、教育側には、その計画を専門に作成する立場の人がいなかった。その意味では、指導主事としての筆者は存在意義が大きかったと自負している。

○平成13年度

計画と実態が整合しているかを、開校した学校に常駐して、坂口校長や地域住民、生徒と話し合った。また、視察者には、基本構想と建築とのかかわり、生徒の実態と教科センター方式の運営の実態などの説明を行った。

I. 住民参画が教科センター方式の学校を誕生させた

筆者が赴任するまでの動きを住民参加の視点から時間を

追って記述する。

平成6年度…議会で、統合中学校をつくるか否かを、民意を反映したうえで、町長に意見を提出することになった。

平成7年度…教育委員会を中心に町内20カ所及び3小学校での座談会を経て、町民合意を町長に具申した。町民とアドバイス役とでなる、統合中学校建設推進委員会が発足した。

平成8年度…建設推進委員会は2年間で24回の会合と先進校視察を繰り返した。

平成9年度…町民を対象に武藤義男元三春町教育長、長澤悟先生の講演会の実施。

教科センター方式の学校運営を採用する中学校を教育委員会です承（9月22日）

年表で追ってみるとあっさりと見えるが、後に振り返ると、建設推進委員会の役割が聖籠中学校が町民主体で作られた鍵になっていたと考える。委員の中には、教育関係者は、大学関係2人、元県教育委員会教育長1人、それ以外の17名は町民であった。また、その方たちの中には、中学校を統合することに反対を唱えた方もいたという。委員会の報告書を読むと、委員会を開催するたびに町民の理解と関心が深まっていくのが読みとれる。それも、教育関係者が当然と思っていることに疑問を投げかけている。それだけ、根本に立ち戻って検討したということである。

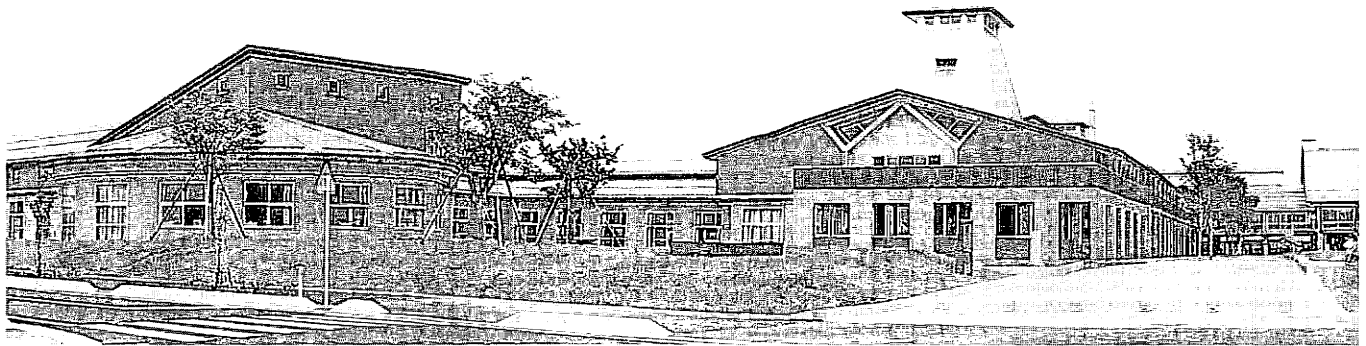
たとえば、多くの教員は荒れを収めるには管理をしていかなければならないと考えるのに対し、町民は大人が生徒に対する接し方を根本から考え直すことから始めた。このような学習と肌でふれた先進校視察で、建築の様式ではあるが教科センター方式を取り入れたと理解している。

平成9年9月22日の「聖籠町立統合中学校建設基本構想と基本計画」で、次の5点を基本構想として提案している。

- ・教科センター方式を運営方式の基本とする
- ・一人一人の豊かな個性を育み、心身の創造の場とする
- ・ゆとりと潤いのある生活空間とする
- ・多様な教育メディアや高度情報機器を活用し、総合的情報空間を設ける
- ・生涯学習施設としての機能を持ち、地域に開かれた学校とする

II. 基本構想と教科センター方式をマッチングさせる計画

筆者が赴任して、すぐ取りかかったものは次の点である。



聖籠中学校外観

- ・幼稚園、小学校、中学校の教員がどのように関われるか。
- ・多くの町民が中学校建設にどのくらい関われるか。
- ・建築に上記の2点をどう生かせるか。

上記の3点と前年の9月22日に出されたものをマッチングさせることは、それまでの3年間の活動を凝縮して体験することが近道と考え、次のことを実施した。

- ・町バスでの町民視察（三春町や加須平成中へ）7回実施。文で書いてあることと、視察校で実現していることから、統合中学校がイメージされていった。
- ・教員による視察（三春町や打瀬中、緒川・卯ノ里小へ）幼保、小、中の教員で訪れ、帰りの新幹線では新しい学校や町の教育の在り方にまで議論を重ねた。

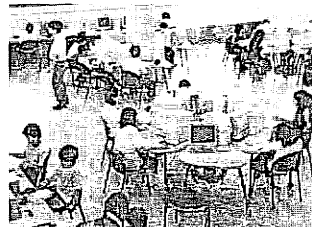
- ・統合中学校を育てる会を開催。この会は、後に自主運営され、現在「せいろう共育ひろばみらいのたね」と名称が変わり、聖籠中学校にボランティアとして常駐し、生徒と学校職員、町民をつなげる大事な役割を担っている。

同時に、学校の運営を具体化していく作業を、教務主任会と研究主任会を開催して、町内幼保、小、中9学校園に広がるようにしていった。ここでの話を建築側にも伝えて、ハードとソフトが基本構想と合致しているか常にチェックをしていった。

Ⅲ. 開校しても、なかなか他には理解してもらえないこと

(1) 人間関係を薄くしたことは教育界の非常識？

特別活動を主に研究している県内の校長先生から「高1さん、聖籠中は失敗すると思っていた。ホームベースと学級を分けたり、授業も学級を基本的に母体としていない。人間関係を薄めるような学校づくりではうまくいかない。でも、聖籠中の成果をみると自分の考えを修正する必要がある。」と言われた。この聖籠中の考え方は、他の教科センター方式をとっている学校でもみられないやり方である。しかし、現実の生徒は、学級という濃すぎる、しかも、



コンピュータ教室



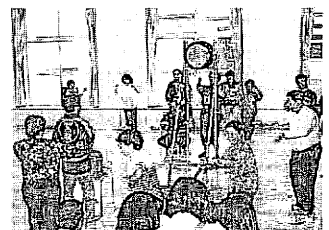
グラウンドでの生徒



ホームベース



「学校の森」



青春広場で、聖籠盆おどり

与えられた人間関係を大人から求められることに対して拒否していると思える。大人が求めた人間関係で、いじめや不登校がでた可能性もある。人間関係がなくていいと主張しているのではなく、無理矢理でなく様々な活動、様々な集団に所属し、自分が選択できる関係を学校全体にまで広げた試みである。

(2) 昼休みを長くするのは教育界の非常識？

昼休みを短くして、放課後の部活動の時間をとることが大事だという風潮がある。部活動も大事であろう。しかし、自己選択の意味から積極的に昼休みをとらえた結果、次のような様相が出た。

昼食後1時間の休み時間をとっている。開校当時コンピュータ180台を奪いあっていた生徒が、しばらくして、グラウンドやホームベースなど思い思いのところで過ごすようになった。町民専用のガラス張りの部屋に町民と話をしにいく。教科教務室に様々な生徒が相談しにいく。町民と梅干しづくり、絵手紙など日常的な交流をしている。部活動も確かにすべてが全国大会に行くなどというようにはなっていないが、多くの部活は県大会に駒を進めている。

Ⅳ. おわりに

不登校数の変化を挙げてみた。おおむね減少傾向であり、中学校入学してからの新たな発生はほとんどない。また、生徒のアンケートでは、学校が楽しい(79%)仲間はずれや無視されたことがほとんどない(88%)嫌がらせやいた

平成12年	開校前	25人	5.13%
平成13年		16人	3.33%
平成14年		17人	3.51%
平成15年		12人	2.41%
平成16年	6月末	6人	

ずらをされたことがほとんどない(95%)となっている。

加藤幸次(上智大学教授)先生が「マン・ツー・エンバイロメントシステム」ということで、これまでの教師と生徒との関係だけから、教科教室型学校では、学習環境を整えることになり、生徒と教師との関係を助けて豊かにすることを分析している。私たちは、これまで空間的に豊かでない学習環境で過ごしていた。聖籠中では、空間が変化することをきっかけにして、教育内容も方法も変化せざるをえなかった。その変化を住民も教師も積極的にとらえなおすきっかけにしたと言える。◆

〔参考〕

- ・開校して4年目を迎える聖籠中学校を知りたい方は、ホームページ<http://www.seiro.ed.jp>をご覧ください。
- ・また、『学校という“まち”が創る学び』(ぎょうせい2003年11月1日発行)が刊行されています。
- ・『学校ブランドの創造 特色ある学校づくり』第一法規2004年が刊行されています。



高口 和治

1957年新潟県生まれ
早稲田大学教育学部卒業
新潟県公立中学校、新潟大学教育学部
附属新潟中学校、バンコク日本人学校、

聖籠町教育委員会指導主事
現在 新潟大学教育人間科学部附属
新潟中学校教頭

本校の運営理念(教科教室型システム)と、そこで学んだ生徒による学校評価

茨城県大洗町立南中学校 教頭

大澤 信一

I. はじめに

本校は茨城県内初の教科教室型学校として平成12年に完成し、今年度で5年目を迎えました。一口に教科教室型と言っても学校によっていろいろなパターンがあり、当然ながら建物そのものの造りや運営に対する考え方も違ってきます。それは、学校を造る段階で造る側がどのような教育をしていきたいのか、そのためにどのような建物を造っていききたいのか、そしてその建物をどのように生かした学校運営をしていきたいのかの考え方によって大きく変わってくるものと思われます。

教科教室型学校の歴史は古く、屋敷和佳氏(国立教育政策研究所)の調査⁽¹⁾によると昭和25年に長野県の飯田東中学校で最初に開校され、平成8年度時点までに46校がこのシステムを取り入れていたそうです。しかし、調査時点では半数以上の27校がこのシステムを取り止め、実施校は19校にまで減ったとの事実も報告されています。では、なぜ取り止めにってしまったのでしょうか。理由として一番多かったのが生徒指導の問題、続いてこのシステムがもつ利点よりも問題点が多くなってしまったからだそうです。

教科教室型システムは、教科独自の雰囲気の中で専門性を生かした指導がやりやすい利点をもっていますが、学級等のまとまった活動が少なくなるため集団への帰属意識が希薄になりやすい面ももっています。ですから、集団としての関わりの中で培わなくてはならない豊かな心や社会性を育てることがおろそかになってしまう危険性があるのです。また、移動を面倒だと感じる生徒もいる訳で、教科担任の工夫とアイデアがないと普通教室での授業と変わらず、移動してまで学習する意味がなくなってしまうことにもなります。

本校では、教科教室型システムの利点と問題点を十分に考え、建物を造る段階から学校運営を視野に入れた実施設計を行い、現在においても過去に取り止めた学校からの教訓を生かした教育活動を展開しています。今回、教科教室型学校運営5年目を振り返る機会を頂きましたので、本校としての学校運営理念と、実際にこのシステムの中で生活した生徒たちがこの校舎をどのように考え、本校の教育活動の中でどのように育ったのかについて、アンケートを基に検証したことを述べてみたいと思います。

II. 教科教室型システムの良さを生かす学校運営

1. 教科の専門性を生かした魅力ある環境づくり

移動して学ぶ生徒から見れば、学ぶ場が魅力あるもので

なければなりません。魅力ある場であれば主体的に学ぼうとする気持ちが高まり、学習意欲の向上につながるものです。ですから、「教科教室に来る魅力を失ったらこのシステムは崩れる」ということをいつも念頭に置いておかねばなりません。

確かに本校のような小規模校からすれば、教科担任にかかる負担は大きいものがあります。しかし、常に新しい環境構成により、生徒が意欲を持って主体的に学習する場を設定していかなければこのシステムは成り立たないのです。

2. 学習指導に対する視点の転換と指導方法の改善

このことについては、次の3点を推進していかなければならないと考えています。

(1)「教える側」から「学ぶ側」に視点を変えられる教師

このシステムは「教える側」にとって都合がよいように受け取られがちですが、実はその逆で「学ぶ側」にとって一番学びやすい魅力に満ちたシステムなのです。だからこそ、教科経営(物的な面、人的な面、指導方法の面)に当たっては、常に学ぶ側の視点に立って考えていかなければならないのです。

(2) 学習指導方法の改善ができる教師

このシステムを有効に活用するには、従来の普通教室型での指導方法から脱却しなければなりません。教科教室や教科メディアの空間、あるいは共通メディアまで広げた空間を生かして課題解決的な学習や習熟度別の少人数指導等、多様な指導方法を工夫し一人一人の求めに応じた学習が展開されなければならないのです。

(3) 生徒の主体的学びを育てられる教師

生徒が主体的に学習し楽しさを味わうために、教師は日々何をしなくてはならないのかを考え授業に臨まなければならないと思います。単に学習の場が教科教室だけという工夫のない授業なら、移動してまで学ぶ意味はないのです。

3. 生徒指導の充実

教科教室制経験校の中で取り止めた学校では、その理由として一番多かったのがこの生徒指導の問題でした。毎時間教室移動をするこのシステムでは、生徒の所在がつかみづらいという問題点ももっています。特に本校では、隠れようと思えばいくらでも隠れ場所があり、コンピュータや県近代美術館から借用の絵画などへのいたずらも、その気になればすぐ手の届く状況にあります。

本校では、学校経営方針の一つとして「優しさの中の厳しさを、瑣事を大切に」ということを重視して取り組んで

います。髪型や服装の乱れは勿論、靴の踵踏みなどの一寸したことを見逃さず、「大人社会で許されないことは子ども社会でも許されない」という姿勢で指導に当たっています。しかし、力で押さえつけるのではなく、生徒と教師の人間関係づくりが基盤であることを認識し、日常生活における温かい言葉かけなど生徒の心の耕しを重視しています。また、毎年見直しが図られている「生徒と先生でつくる学校のきまり」も生徒に対する一方的な押しつけではなく、より良い学校生活を願う両者の合意の上に成り立つ素晴らしい方法の一つであると考えています。

Ⅲ. 生徒はこの校舎をどのように考え、どのような力が育ったのか

教科教室型を開校して4年目を迎えた昨年度、この校舎で3年間生活した卒業生を対象に「新しい校舎の南中で3年間生活したことがどうだったのか」を検証するためにアンケートを実施しました。回収率も70%を超えており、施設と学校運営に対する外部評価では信頼できるものであると考えています。

学校の施設のどんな所が良くて、どんな所が使いづらかったか。

施設全般に対しては90%以上の生徒が誇りに思い、約85%の生徒が潤いがあると感じ、約80%の生徒が学習面でも生活面でも使いやすくと答えています。

学校の中で好きな場所についてはホームベースをあげている生徒が一番多く、90%以上の生徒が「落ち着く場所」、約75%の生徒が「狭いながらも自分の学級を感じられる空間」と捉えていました。このホームベースについては人間的な触れ合いの中心となる学級集団を大切にしようということで、設計の段階で可能な限りの広さを確保し、朝の会や帰りの会がスムーズにできるようにホームベースの隣には教科教室が必ずあるように造られました。当然ロッカールームというイメージではなく、普通の学級にあるような掲示物も掲示され、温かみのある「居場所」としての空間づくりをしています。

逆に、使いづらい場所や改善して欲しい所についてはロッカーが一番多くあげられ、70%の生徒が「狭く使いづらい」と答えていました。容量が小さく2段になっているため、上下や左右の人との同時使用ができないことが理由となっています。設計の段階でホームベースの居住性や掲示スペースの確保から限定された大きさのロッカーでしたが、毎時間毎の使用を考えると機能面での課題としてあげられます。

南中の生活は楽しかったのか、大変だったことはなかったのか。

教科教室型の南中での生活は楽しかったと、約85%の生徒が感じていました。楽しかった理由として談話できる空間を使った「友達との語らい」や、「部活動」があげられていました。

逆に困ったことや大変だったことについては、約50%の生徒が「移動」をあげていました。毎時間移動することは生徒にとってはやはり面倒であり、時間的にゆっくりできず先生への質問などもあまりできなかったと感じています。しかし、教科教室に移動してその教科の雰囲気を感じると約85%の生徒が答え、学習意欲も増すと約60%の生徒が答えていました。

教科教室型システムの生命線はこの「移動」であり、移動してまで学ぶ魅力がなくなってしまうと、正にデメリットそのものになってしまうのです。本校では、ここに教科教室型学校運営の正否を分けるキーポイントがあると考えています。

このシステムでの学習はどうだったのか、学力は向上したのか。

広い空間を確保し多様な指導方法に対応するため、教科教室と教科メディアの間に仕切を入れないオープンスペースの構造をとっているのが、本校の構造的な特色です。県から定数加配による教員もいただき、その空間を生かした少人数指導等の多様な指導方法の工夫改善にも取り組んできました。この少人数指導やTTについては約70%の生徒が学力向上に役立ったと答え、各教科の授業についても約70%の生徒が分かりやすかったと答えていました。学力向上の実態については、毎年4月に行っている県の統一テストでは1年生の時に4教科合計の県平均比較でプラス1.6点だったものが、3年生の9月に実施した実力テストでは5教科合計の県平均比較でプラス28.1点まで伸びたことでも検証できています。

また、オープンスペースのため隣の教室での授業が気になり集中できないのではという懸念がありましたが、80%の生徒が自分たちの授業に集中できたと答えていました。

南中で生活して、豊かな心や自主・自立の心は育ったのか。

豊かな心については約80%の生徒が、自主・自立の心については約85%の生徒が育ったと答えています。その中でも、「友達の失敗を許す」は90%以上、「元気にあいさつ」

「友達と仲良く生活」「きまりを進んで守る」「仕事は責任を持って」「進んで毎日の清掃」「今までの自分より良くなろうと努力」については80%以上の生徒ができるようになったと答えています。

本校では、教科指導ばかりでなく、心の教育に重点を置いた教育活動の充実を図ってきました。学級集団を中心とした心の触れ合いに重点を置いた活動で思いやりや協力が育ち、生徒会を中心とした毎朝のあいさつ運動で元気なあいさつができるようになり、生徒一人一人が参画して考える「先生と生徒でつくる生活のきまり」で規範意識が育っていると考えます。また、生徒との共働で行う毎日の清掃、自分で考えて行動するノーチャイム、自主・自立を目指す「自主参加のサークル活動」なども心や態度の成長に大きな成果を上げていると考えられます。「忍耐力がついた」と答えている生徒も80%近くあり、ほぼ全員加入している部活動への取り組みも大きな成果となって表れています。

ただ、残りの20%前後の生徒は良くできていないと答えている訳ですから、全体的傾向に終わらず、生徒一人一人に目を向けながら心の耕しをしていかなければならないと考えています。

南中で学んだことはどうだったのか。今後に願うことは。

教科教室型学校で3年間過ごして良かったこととして、ノーチャイムなど自分で時間を気にしたり自分で考えて行動したりしたことで、自主性が育ったことなどをあげている生徒が多くありました。南中学校の3年間でついた力としては、学習面では授業に対する意欲や集中力、自主的な学習態度を多くあげ、精神面では強い精神力や我慢強さ、自主・自立の心などを多くあげていました。生活面ではあいさつや規則正しい生活、自主的行動などが多くあげられました。

また、南中学校の素晴らしいところについては、「校舎も素晴らしいがやはり生徒だと思う。高校へ来て南中がどれほど良かったかが実感できた。」など、生徒の素晴らしさをあげる生徒が多くいることに驚きました。

今後の教科教室型学校の建築及び運営に当たっては、ハード面ではホームベースをもっと大きく、ソフト面では各教科の特色を持たせ勉強が楽しくなる環境づくりを願っていることが分かりました。今後建築予定の学校についてはホームベースの果たす役割について検討して頂くとともに、本校においても教科色を生かした魅力ある環境づくりに、さらに努力していかなければならないと再認識してい

ます。

IV. おわりに

教科教室型システムに対する本校の学校運営を、そこで3年間生活しながら学んだ生徒の声を聴きながら検証してきました。学校評価という点については今回、3年間過ごした卒業生を対象に行いましたが、今後は現在学んでいる生徒を対象に授業評価をしていく予定です。

大事なことは生徒の教育に当たる我々教師集団が、独りよがりになってはいけないということです。そのためにも毎年、同じシステムをもつ他校への視察を実施し、良いものはどんどん取り入れるとともに、危機感を感じるものについては自分の学校に置き換えて捉えながら、さらに発展できる学校づくりを目指していきたいと考えています。

(注1) 平成9年6月「中学校・高等学校における教育多様化のための施設・設備の改革と課題に関する研究」



大澤 信一